

レクリエーション研究

第23号

第20回日本レクリエーション学会
(大会発表論文集)

平成2年11月10・11日

於：明 治 大 学
(大 学 会 館)

日本レクリエーション学会

1990年11月

原稿提出要領

1. 印刷・製本

発表論文は、提出された原稿をそのまま縮写し、論文一題につきB5版見開き2頁にオフセット印刷され、レクリエーション研究（大会発表論文集）として製本される。

2. 原稿用紙

提出原稿は、指定の原稿用紙（A4版）2枚に限る。なお予備を含め合計4枚の原稿用紙が同封されている。

3. 文字

本文文字は、邦文タイプ（4号活字）またはワードプロセッサ（12ポイント・24ドット以上）を用いて、横書き印字したものに限り。

4. 演題・氏名等

- ① 演題は、原稿用紙上部第1行と2行を用い、副題がある場合には行を改めて記載する。
- ② 演題には、本文より大きな活字または倍角文字を用いること。
- ③ 氏名は、演者と共同研究者について行を改めて区別し、演者には氏名のすぐ前に○印を付けること。
- ④ 所属機関名は、氏名に続いて（ ）内に記入する。また複数の共同研究者が同一の機関に所属する場合には、まとめて（ ）内に記入する。

5. キーワード

論文の内容を適確に表現するようなキーワードを、第6行目に2～5語程度記載すること。

6. 本文

- ① 本文は、目的・方法・結果・考察・結論など、できるだけ分かりやすくまとめ、研究論文として完結していること。
- ② 本文各段は、最初の一字分をあけて書き始めること。
- ③ 原稿用紙の字数は、40字×40行の1,600字となっている。
- ④ 図表などを使用する場合にも、必ず本文枠内に収めること。

7. 送付要領

- ① 同封の厚紙にはさみ、原稿とそのコピー2部を同封のこと。
- ② 同封の提出用封筒を使用し、書留郵便（簡易書留可）で郵送のこと。
- ③ 提出要領が守られていない場合には、原稿を受付けない場合がある。

8. 締切期日

平成2年9月15日（土） 当日消印有効

9. 送付先

〒305 つくば市天王台1-1 筑波大学体育科学系 吉田 章 気付
日本レクリエーション学会 編集委員会 宛

第20回日本レクリエーション学会 大会開催にあたって

日本レクリエーション学会

会長 浅田 隆 夫

今日、科学技術の革新により情報化・国際化が一段と進み、これに伴って、自由時間の増大とともに物心両面の「ゆとり」が志向され、しかも、一人ひとりのライフスタイルにマッチした生活文化のあり方が希求されるようになりました。

しかし、これに応える産業部門の振興や環境・施設の整備も、人材養成やプログラム開発も、行政施策の遅れもあって、かなりの社会的遅滞がみられます。それだけに学者・研究者や研究者集団の援助が求められているといえましょう。

また、臨教審の答申に基づき、文部省も生涯教育局を設け、来たるべき生涯学習社会を志向して生涯学習振興法を作成、環境・施設の充実や人材養成をはじめ地域の生活文化の活性化を意図しています。

本学会は、発足以来27年目に当たり学会大会という名称では20周年という節目を迎えました。

このような内外の状況を踏まえながら、本年度は、会員の個人発表の他、基調講演やシンポジウムのテーマを設定し、斯界の名士をお迎えして盛大に行うことになりました。

会員のみなさんはもちろん、会員以外の方々のご参加を心から期待しております。

日本レクリエーション学会 第20回大会開催要領

1. 主催 日本レクリエーション学会
2. 主管 日本レクリエーション学会第20回大会実行委員会
3. 期間 平成2年11月10日(土)・11日(日)
4. 会場 明治大学(大会会館)
〒101 千代田区神田駿河台1-1 ☎ 03-296-4545
5. 日程
11月10日(土)
13:00 受付開始
14:00
} 基調講演
15:20
15:40
} シンポジウム
17:40
18:00
} 懇親会
20:00
11月11日(日)
8:30 受付開始
9:00
} 研究発表
11:40
12:00 理事会
13:00 総会
14:00
} 研究発表
16:00 終了
6. 研究発表 レクリエーション研究第20回学会大会発表論文集として掲載
7. 実行委員会 〒168 杉並区永福1-9-1 明治大学和泉校舎 保健体育研究室内
委員長 黒田 信寛
委員 寺島 善一 星野 敏男

第20回日本レクリエーション学会 大会本部企画

◎ 大会テーマ 『生涯学習時代のレジャー・レクリエーション』

“人生80年時代をいかに生きるか”。今この問題が、日本人一人ひとりの課題となっ
ています。人生80年は、生涯生活時間に換算して70万時間。このうち生涯の労働時間が1割にまで
短縮し、代わって自由時間が3割にまで拡大する見通しです。すなわち、これまでの仕事人
生に加えて、レジャー・レクリエーションの人生を充実して生きることが重要な課題となっ
て来ます。

学問の分野においても、行政の分野においても、この人生80年時代に向かって様々なプロジ
ェクトを展開していますが、日本レクリエーション学会でも20周年を記念し、この問題に
取り組んでみました。

◎ 基調講演 『生活文化としてのレジャー・レクリエーション』

講 師：小塩 節 氏 中央大学 教授

司 会：徳久 球雄 氏 青山学院大学 教授（学会常任理事）

小塩先生は2年間にわたり、経済企画庁国民生活審議会の余暇・生活文化部会座長を務め
られ、この度、人生80年時代の価値観・ライフスタイル・社会システムの在り方についてと
りまとめをなさいました。これらのプロセスを通して、先生御自身が、これからの時代の生
活と社会をどのように感じとられたのか、語っていただきます。

◎ シンポジウム 『学習社会におけるレジャー・レクリエーション』

パネラー：稲垣 良典 氏 九州大学 教授

佐藤 敏夫 氏 東京神学大学 教授

野中ともよ 氏 中京女子大学 客員教授

司 会：松田 義幸 氏 筑波大学 助教授（学会常任理事）

我が国では、レジャー・レクリエーションがまだまだ周辺的な問題と受けとめられてい
ますが、もともとは人生の中心的問題、幸福の問題としてとらえられていたのです。そこで
シンポジウムでは基調講演を受け、日常の具体的生活の次元でそれをいかに実現すべきか
を議論してみたいと思います。

稲垣先生は、アリストテレス、トマス・アクィナスの研究で知られ、レジャー哲学の在り
方を示したヨゼフ・ピーパーと親しくこの問題を研究されました。そしてこれからの社会を、
学習社会として構想されています。

佐藤先生は、「レジャーの神学」を著わされ、自由時間の多い人生をいかに充実して生き
るべきか、この問題を思索し続けられています。中でも自由学芸とレジャーの問題に関心を
寄せられています。

野中先生は、国民生活審議会の余暇・生活文化部会委員として、レジャー・レクリエーシ
ョンの哲学・プログラムを、私達の具体的な生活の次元でいかに実現すべきかユニークな提
案をされています。

第20回日本レクリエーション学会発表演題

(大会プログラム)

= A 会場 =

9:00<座長：鈴木 祐一>

A-1 レジャー時代の余暇教育

○久川 太郎 (流通経済大学)

A-2 ヨハン・ホイジンガのプレイ論に関する歴史的研究

○杉浦 恭 (筑波大学大学院研究生)

A-3 東洋的身体観に基づくレクリエーション概念分析の試み

○芳賀 健治 (東京家政学院大学)

10:00<座長：北條 明美>

A-4 「レクリエーション指導」概念の変遷と展望

○千葉 和夫 (日本社会事業大学)

A-5 ニュージーランドにおけるガーデニングのレクリエーション的価値

○杉尾 邦江 (プレック研究所)

A-6 自然意識(2)

○塚本 瑠一 (大阪薫英女子短期大学)

11:00<座長：芳賀 健治>

A-7 キャンプ経験による児童の自然観の変化

～連想法を用いて～

○中野 友博 (筑波大学)

A-8 冒険キャンプ経験が児童の一般性セルフ・エフィカシーに及ぼす影響

○関根 章文 (筑波大学大学院)

12:00～13:00 理事会

13:00～14:00 総会

14:00<座長：鈴木 秀雄>

A-9 キャンプに対する高齢参加者の意識

～キャンプ参加高齢者の不安を中心として～

○中島 一郎 (国際武道大学)

A-10 神奈川県における盲人卓球

～練習を支援するボランティアを中心に～

○渡辺 文治 (神奈川県総合リハビリテーションセンター)

14:40<座長：西野 仁>

A-11 生涯学習社会に向けての生涯学習システムとしての地域生活文化

～山形・黒川能を支える人々の生活史研究をモデルとして～

○梅澤 佳子 (日本航空レジャーライフ研究所研究員)

A-12 転換期における国民体育大会の意義と役割に関する調査

～特に生涯スポーツの振興事業としての観点から～

○鴨井 啓 (大竹総合科学専門学校)

= B 会 場 =

9:00<座長:赤井 利男>

B-1 「歩くスキー」の概念の明確化に関する一考察

○三浦 裕 (北海道教育大学)

B-2 100キロハイクに関する研究

○佐藤 初雄 (国際自然大学校NOTS)

B-3 ホノルルマラソン完走者の満足要因の分析

～日本人完走者を対象として～

○松本 耕二 (鹿屋体育大学大学院)

10:00<座長:秋吉 嘉範>

B-4 地域におけるスポーツイベントの研究(1)

～菜の花マラソン完走者の満足要因の分析～

○野川 春夫 (鹿屋体育大学)

B-5 地域におけるスポーツイベントの研究(2)

～ボランティアの継続意欲を規定する要因の分析～

○長ヶ原 誠 (鹿屋体育大学)

B-6 地域におけるスポーツイベントの研究(3)

～地域ビジネスとの関連から～

○菊池 秀夫 (鹿屋体育大学)

11:00<座長:中島 豊雄>

B-7 成人男性のライフステージから見たレジャー・ライフスタイル

○川西 正志 (鹿屋体育大学)

B-8 成人男性の旅行型レジャー実施者のパケージョン・ライフスタイル

○北村 尚浩 (鹿屋体育大学)

12:00～13:00 理事会

13:00～14:00 総会

14:00<座長:石井 允>

B-9 スポーツにおける若者(女子)のライフスタイル

○梅津 迪子 (女子聖学院短期大学)

B-10 現代青年(女子)のスポーツ意識・行動の傾向について

○松浦 三代子 (東京女子体育大学)

B-11 女性の余暇活動参加歴に関する研究

○三宅 基子 (日本レクリエーション協会)

15:00<座長:師岡 文男>

B-12 リゾート地におけるレジャー・ダイバーの意識について

○千足 耕一 (筑波大学大学院)

B-13 民間スポーツクラブの将来予測に関する研究Ⅱ

～成熟期におけるスポーツクラブ運営への提言～

○富山 浩三 (大阪YMCA社会体育専門学校)

参加者への御案内

1. 受付

11月10日（土）午後1時および11月11日（日）午前8時30分より受付を行います。下記参加費をお支払い下さい。

| | |
|---------------|--------|
| 正会員・特別会員 | 3,000円 |
| 学生会員（資料代） | 1,000円 |
| 名誉会員・賛助会員 | 無料 |
| その他一般の方（当日会員） | 3,000円 |

2. 大会本部

明治大学経済学部事務室

3. 車輛の入構について

大学構内への入構および駐車不可能です。

4. 休憩と食事

大学近隣の食堂が営業していますのでご利用下さい。

5. 会場内禁煙のお願い

発表会場内は禁煙です。喫煙所をお願いします。

（発表者へのお願いとお知らせ）

1. 発表受付

各発表会場の入口で発表受付を行います。各自の発表時刻の30分前までに受付をすませ、「次演者席」におつき下さい。

2. 発表資料

研究発表補足資料等については、100部を発表受付時に提出して下さい。資料には、必ず演習番号（例・A-1、A-2）、演題、演者氏名を明記して下さい。

3. スライド

スライド映写を希望される方は、発表受付にあるホルダーに、各自で順序正しく正像に写るように入力して、発表受付にご提出下さい。スライドの大きさは、35mmフィルム用の標準マウント（50×50mm）に限ります。

4. 発表時間

各発表演題につき、発表15分、質疑討論5分程度です（13分一ペル1回、15分一ペル2回、セッション終了一ペル3回）。なお質疑討論は、各発表セッション毎にまとめて行います。

（座長へのお願いとお知らせ）

各発表会場の入口で座長受付を行います。座長開始30分前までに必ず受付をお済ませいただき、開始20分前までに「次座長席」におすわり下さい。

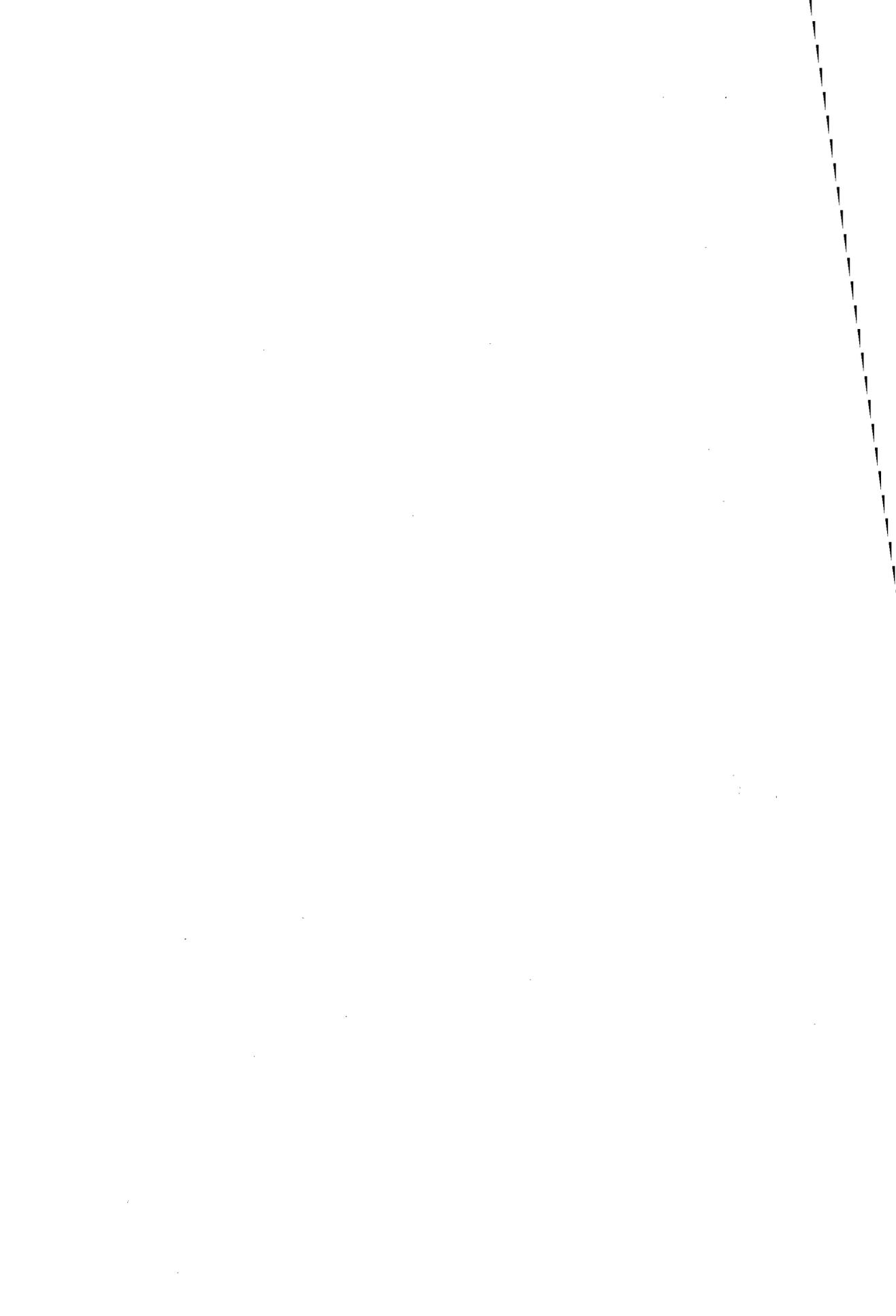
時間を厳守して進行させるようにご協力下さい。

質疑討論は、各セッション毎にまとめて該当時間内でとり行なうようにお願いします。

発表取消などで空き時間ができた場合は、討論や休憩にあてられるなど、自由にご裁量下さい。

（討論者・質問者へのお願い）

挙手のあと、座長の合図を待って、所属、氏名を告げたのち、参加者にわかるように発言して下さい。



發 表 論 文

レジャー時代の余暇教育

○ 久川 太郎 (流通経済大学)

余暇教育

I はじめに

我が国にも、レジャー時代が到来した。それは、労働時間の短縮、週休2日制・夏季一斉休暇等の普及による労働環境条件の改善、耐久消費財の普及による女性の家事労働からの解放、あるいは人々の余暇活動に対する欲求の高まりによるものであった。しかし急激な社会変動、産業文明の進展は価値感の変動を生じ、社会や個人に、余暇時代に対する準備をするひまを与えてくれなかった。現代の生活にみられるギャンブル、アルコール、スピード、短期集中型の旅行だけがレジャー時代の欲求を充足させるものではない。むしろ、こうしたものの異常なまでの普及こそが、レジャー時代に適応できなかった人間のノイローゼ現象とみるべきであろう。レジャー時代が到来した今こそ、私達は、今まで常に労働と対比して見られてきた余暇を新たな視点から見直し、レジャー時代に適応できる社会体制を整ねばならない。今回は、現在の我が国の余暇活動を分析し、その問題点を明らかにして、レジャー時代に適応するため社会体制等の整備、さらに余暇教育の必要性について述べたい。

II 我が国の余暇活動と問題点

我が国の現在の余暇活動は、「平日」「休日」「3日以上 of 長期の休暇」に区分されよう。まず平日の余暇活動では、「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌などの見聞き」、「何もしていないでのんびりする」など休養型、疲労回復型が圧倒的に多い。次に休日の余暇活動をみると平日と同様に「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌などの見聞き」が一番多いが、「家族との団らん」「友人などとの交際」「軽い運動やスポーツ活動」「趣味・娯楽」「飲食・ショッピング」といった室内から戸外へあるいはより創造的な活動が多くなる傾向が見られる。さらに、3日以上 of 長期の休暇での余暇活動は「宿泊を伴った旅行」「日帰りの行楽」「ドライブ」など費用もかかる活動の占める割合が多くなっている。

このように我が国の余暇活動は余暇時間の増大と経済的ゆとりから欧米型に近づき一見望ましいように見えるが、それは表向きのことであり、本当のゆとりの中でのレジャーには程遠いと思われる。それはゴールデンウィーク等のすごし方を見ても言える。すなわち過密スケジュールによる駆け足のレジャーになりやすく、心身のリフレッシュにならないばかりか、事故につながつ恐れすらある。このように我が国のレジャーには①短期間中型であること②最近では旅行先でスポーツを楽しむ傾向があること③移動に車が利用されるため往復とも交通渋滞に疾れ、イライラを募らせると大事故につながる危険性があることが問題点としてあげられよう。さらに今後レジャーはますます大衆化し大型化してゆくと考えられるわけで、快適な余暇をすすするための社会体制や施設の整備が重要であり、また学校や社会での余暇時代に適応するための余暇教育が急務となってくると考えられる。

III レジャー時代に対応した社会体制と施設の整備

今まで見てきたようにレジャー時代を迎えた我が国の余暇活動を更に充実したものにす

るためにはレジャー時代に対応した社会体制と施設の整備が必要である。余暇に対する考え方は入社後5年以内の人では「仕事は仕事、余暇は余暇」と考える人が多く、仕事優先の従来の見方とは顕著な差が認められる。また「休日にもっともしたいこと」では、ドライブ、ハイキング、旅行、参加するスポーツといった能動的な活動を求めている。若い人のみならず私達が余暇や自由時間をもっと楽しむために、労働時間の短縮、夏季等の長期休暇の普及、更に平日の休暇をとりやすくすることによって余暇施設を効果的に利用できるようにするなどが考えられる。これらにより日本特有といわれる短期集中型、また画一的なレジャー活動が、多様化・個性化してゆくとされる。さらに企業の厚生施設の充実を待つだけでなく安く良質な公共の宿泊施設の充実、スポーツ・文化センターの整備、身近な公園や公共施設の整備といった施設の整備があげられる。日本ではレジャー時代の到来といってもまだレジャーの時間や費用に余裕がなく表向きの華かさとは裏腹に、本当のゆとりの中でのレジャーには程遠い。これらレジャー時代に対応した社会体制と施設の整備によってゆとりのあるレジャーが可能となると考えられる。

IV 余暇教育

我が国の余暇活動は、ゴールデンウィークのすごし方を見ても解る通り、まだまだレジャーブームに踊らされた、アンバランスな余暇感覚が感じられる。今後ますます大衆化され、個性化する余暇活動に対応するためにはライフサイクルに合わせた余暇教育が急務となってくる。それは学校や公共機関等における趣味やスポーツを楽しむ能力の育成することである。高令化社会を迎える我が国は、学校教育の中でも心身のバランスのとれた発育を目指すとともに、余暇時代に対応する教育が必要となってきた。例えば小学校から大学に至るまで特に高校・大学では社会生活に適應するため従来の部活や正課の中に新たな種目加わることが望ましい。現在大学の体育実技の中に、ゴルフ、ボウリング、トレーニング、フィットネス（ジュギング）などの種目が実施され始めている。その数はまだ多くはないが、そこにはレジャー時代に対応しようとする姿がうかがえる。また学校教育のあらゆる場面でもレジャー時代に対応するための意識や考え方が学ばれるべきである。さらに学校だけでなく、地域活動の中でも趣味やスポーツを楽しむ能力を育成するために、各種の教室の開催、サークルの形成、余暇行事の実施、活動の場の提供といったことが必要になってくる。そしてこれらの活動が地域に定着した時に、余暇活動は、平日の活動も休養型から創造型へと移行してゆくと考えられる。

V 終わりに

我が国の余暇活動はレジャー時代到来といわれ表向きは華やかに見えるが、本当のゆとりの中でのレジャーには程遠い。また相変わらず悲惨な海、山の事故や交通事故が絶えない。それはレジャー時代に適應できなかった人々のノイローゼ現象であるとも考えられる。

私達は今後さらに大衆化され、個性化するレジャーに適應するために、レジャー時代に対応した社会体制と施設の整備が必要であり、さらに学校や公共機関における趣味やスポーツを楽しむ能力を育成し、余暇活動を創造的で個性豊かなものにするための余暇教育の充実が急務であると考えている。

ヨハン・ホイジンガのプレイ論に関する 歴史的研究

○杉浦 恭 (筑波大学大学院研究生)

松田義幸 (筑波大学)

キーワード (遊び、夢・理想、文化、精神的価値、物質的価値)

[1] 研究の動機と目的及び方法

人間は、古来より、洋の東西を問わず、物質的価値と精神的価値のバランス、経済的価値と文化的価値のバランスを理想として描いてきた。ところが20世紀に入ると物質的豊かさを重視し、経済的価値が優先され、精神的要素は軽視されてきた。この物質的価値と精神的価値の調和の重要性を考える上で、一つの視点として挙げられるのが、ホイジンガの著した「ホモ・ルーデンス」である。「ホモ・ルーデンス」は、ナチスが精神的価値を軽視したなかで「人間にとって精神的価値がいかに大切か」「人間にとって文化的価値がいかに大切か」の問題意識のもとで考察されたものと思われるからである。

ホイジンガのプレイ論というと「ホモ・ルーデンス」で全てを語る人が見受けられるが、この本が著されるに至った長年のプレイ研究と、彼の生きた時代背景を研究したものは数少ない。そこで本研究ではホイジンガのプレイ論の流れを歴史的に研究すると共に時代背景からの考察も加えることで、精神的価値、文化的価値の重要性を遊びとの関係で考える。研究の方法は、ホイジンガの著作を年代順に調べる文献研究の形式をとった。

[2] 研究の意義

ホイジンガのプレイ論の歴史的流れが明らかになること。また、その中における「ホモ・ルーデンス」の位置づけが明確になること。

ホイジンガのプレイ論を、彼の生きた時代、社会背景とあわせて考えることで、文化及び社会における遊びの重要性が明らかになること。また、精神的価値、文化的価値と、物質的価値、経済的価値のバランスが大切であることがわかること。

[3] 研究の概要

(1) 歴史的な生活理想からのアプローチ

ホイジンガは従来の歴史学の研究方法について疑問を抱いていた。それまでの歴史学が公的の文書だけを頼りに時代像を描いてきたことに対する疑問である。そこで、時代に生きた人びとの生活におけるものの見方、考え方、感受性から時代像をとらえた。

こうして時代を精神の習慣からとらえようとしたとき、人類の歴史には、それぞれの時代に、その時代、その社会にあった生活の理想がみられた。ホイジンガはこれを「歴史的な生活理想」と名づけた。歴史的な生活理想は古代から近代まで、黄金生活、使徒生活(清貧生活)、牧歌的生活、騎士道生活、ルネサンス的生活、バロック的生活、ロココ的生活、ロマン主義的生活という流れでとらえることができる。

どの時代の理想にも共通していえるのは、人間は美しく生きたいという願望をいつももっていたことである。しかし、その美しく生きたいという理想を現実の生活の場で実現することは難しい。そこで、遊びを通して、理想を現実の生活で実践したのである。歴史を

振り返ると、どの時代にも生活理想のなかに共通の要素として遊びがみられる。理想はいつも遊びによって表現されてきたといえる。ホイジンガが遊びを考えるようになるきっかけはここにあるといってもよいだろう。

(2) ホイジンガのプレイ論と文化観の流れ

ホイジンガは遊び自身が、夢、理想を表現する方法として文化を形成してきたことに気づいた。文化は、夢、理想が遊びを通して表現されたときにすでに存在していたといえる。逆にいえば、遊びなくしては文化は存在できなかったのである。

ホイジンガの文化観には1930年代を境にして変化がみられる。1930年代以前は、前にも述べたように、文化はいかにして形成されるか、あるいは、文化の本質はなにかといったテーマが主であった。ところが、1930年代以降になると、文化はいかにあるべきかに関心が移る。これは、文化の記述的研究から規範的研究への移行である。なにゆえ文化の規範的研究へ移ったのであろうか。これはナチスの影響によるところが大きい。文化の条件として、愛、倫理、秩序、義務といった道徳的、倫理的内容を全面にだして述べるのは、ナチスが倫理を無視し、人びとの生活のなかから夢、理想を奪いとったからである。倫理が及ばなくなり、崇高な理想を失った社会は、文化を衰退へ向かわせると考えたのである。

(3) ホイジンガのプレイ観と時代、社会背景

1930年代の西欧はナチスの支配した社会である。ナチスは新しいもの、より進んだものを追求する傾向にあったため、ことさら科学技術に力を入れた。物質的価値ばかりを追求し、精神的価値をおろそかにしたのである。これは、生活の便利さと結びつき、工業化を追い求めることになる。働くことが善であり、遊びは悪と考えられるようになる。人間は働くことだけに専念させられると、全般的に判断力、批判能力の低下を招く。精神的な活動、自ら創造する機会がなくなると、思考能力が低下するからである。すると、正しくないことでも間違っていると思わなくなってしまうのである。その意味で、遊び（自由な精神的活動、創作活動）は、文化の形成だけでなく、人間の倫理観の形成にも一役かっているといえる。ホイジンガは精神的価値、遊びを軽視したナチスを見て、文化の危機と同時に人間性の喪失を感じたのである。文化は国家によって方向づけられるものではない。

[4] 結 論

ホイジンガは、人類の歴史を記述的研究からみたとき、どの時代にも遊びに彩られた崇高な夢、理想が存在していたことに気づいた。これが文化を形成してきたのである。文化は、「夢、理想→シンボル化→遊び→文化表現形式」のコンテキストがその背景にある。ところが、1930年代に入り、生活のなかから遊びが奪われ倫理が及ばなくなると文化を規範的にとらえるようになる。これは物質的価値、経済的価値のみを追求するナチスに文化の危機を訴えるためである。こうして遊びと文化を記述的、規範的に研究して著されたのが「ホモ・ルーデンス」である。ホイジンガのプレイ論は以上のような経緯をとっている。

[5] 展望

20世紀の社会は物質的価値の追求、経済的価値の追求を第一義としてきた。しかし、今後はいかに精神的価値、文化的価値とバランスさせていくかが課題である。崇高な夢、理想をシンボル化し、文化に表現することは、人間の人間たるゆえんといえるからである。

東洋的身体観に基づく

レクリエーション概念分析の試み

○芳賀 健治（東京家政学院大学）

キーワード 東洋的身体観、気、ハレとケとケガレ、気功、

○序

近年、我が国では、気功、太極拳、ヨガ、野口体操、操体法、真向法、自強術、調和道丹田呼吸法、野口整体など、東洋的身体観にもとづく健康法、体操、からだづくりが、注目されつつあるように思われる。これらの多くは、仏教および、さらにそこから派生した修験道系の修行法にその源を辿る事ができると言われている。

さて、これら一連の東洋的身体観に基づく、身体および精神の活性化を目指す各種の方法は、レクリエーションという視点からとらえるならば、どのような位置づけがなされるのであろうか。今後のレクリエーション研究の上で、レクリエーション原論的な視点からこれらの位置づけを整理しておくことは、有意義なことであろうと思われる。

○研究の方法

上述の各種の方法の理論的根拠はまちまちであるが、いずれも人間の身体をとりまく「生体エネルギー」の存在を、あるものは積極的に、あるものは消極的ながらも認めている。気功では、これを「気」と呼び、ヨガでは「プラーナ」と呼んでいる。今回は、「気」の存在を前提としているものに着目し、レクリエーション概念のこれまでの研究を参考にしながら、比較、検討した。

○研究の結果および考察

1) 従来のレクリエーション概念分析について

従来のレクリエーション概念分析についてまず、一通りみてみたが、いずれの場合もレクリエーションは、人間が何等かのエネルギーを失い掛け、あるいはバランスが崩れ、それをある行為によってそのエネルギーを再獲得するというプロセスとしてみる見方がほとんどであった。労働再生産論的レクリエーション論においても、また人間性回復論的レクリエーション論においても、いずれの場合にも何等かの活力なり、エネルギーを獲得するプロセスとして規程されているように思われた。しかし、そのエネルギー的なものは何かということになると、ほとんどがあいまいなままで、あるいは触れられること無く概念分析が為されているように思われた。

また、私が加わった研究の中でも、レクリエーション概念を語源、専門辞典など多数の出典から検討し、レクリエーションを、人間が肉体的にも精神的にも、活力をホメオスタシ的に保ち続けるプロセスと規程した。そしてわが国では、それに対応するものがハレとケの対応であると私の担当部分では規定する試みを行った。波平、桜井らの、「ハレ、ケ、ケガレの循環説」によれば、「ケ」とは、農作物をそだてる根源的エネルギーを指し、さらには農民の労働力の活力源をさすとし、ケの活力が減退した状態が、「気枯れ」すなわち気が枯れた状態が「ケガレ」であるとしている。

ここでは「ケ」は、「気」に通じるとは示唆しているものの、その中心となる「気」の実

体なりエネルギーとしての「ケ」にはまったく触れていない。密教系や修験道の修行においては極めて重要な概念であるにも関わらず、民俗学の分野においても「気」とは何か、「気」について一般民衆がどの様に対応し、認識していたのかについての記述は極めて少ないように思われた。これは「気」の実体が科学的に証明されていないために研究者が深入りを避けてきたためであろうと思われる。

2) 「気」と「レクリエーション」の関連性

各種の東洋的身体観に基づく心身活性化の方法、あるいは東洋医学が根拠としている考え方の中には、今日のレクリエーション概念と結びつく可能性のある認識がいくつか存在していると思われる。「開放系としての身体」という見方は上述の、エネルギー再獲得のプロセスとしてのレクリエーションと重要な関係が在るように思われる。すなわち、開放系としての身体は「気」のエネルギーを天の気、すなわち空気を呼吸として受け入れ、大地の気を「食」として受け入れる。ここでは、人間の身体も心も、「気」というエネルギーの存在を媒介として自然とのバランス、環境とのバランスを保つ。このエネルギーのバランスを保ち、あるいは再獲得するため、あるいはこのエネルギーの流れの滞りを解消するための方法が、気功や太極拳である。中国の気功法では、様々な身体への働きかけによって「気」が巡り、人間の身体および精神が活性化されると考える。病いとは自然と人間のバランスが崩れるということであり、人間関係の崩れ、開放系としての身体のバランスの崩れであると見る。「気」の流れをスムーズにさせることが、東洋医学の考え方である。また、日本における各種の民間治療法、健康法の多くが、この「気」の存在を前提としており、フィジカルな側面のみならず、心の持ちようについても心身一元論的な見方からかなり詳しく体系化されている。

先に心身を活性化させる機能がレクリエーションの本質ではないかと述べたが、活力を獲得する方法としての気功や呼吸法などは、レクリエーションとして見做すことは可能であろうか。これらは、実践することにより心身が活性化されることが多くの人々によって実感されているが、科学的にはまだまだ未知の領域である。ただ、ひとつ重要なことは身体的な方法を実践することで、精神的には、レクリエーション活動に参加した後と同じように、心が晴れ晴れとしたような「感じ」が得られていることである。従来、レクリエーションとしての活動は、非日常的な空間（日常空間から非日常的空間への移動）、非日常的な時間（非日常的な時間の過ごし方）などがその要素として指摘されてきた。「非日常性」は、個人、共同体の構造としての「日常的な世界を健康に保持するための必要な仕掛け、という趣きをもって」これまで社会に受け入れられてきたという指摘もある。しかしながら、気功などの実践者の場合、心身を活性化させるためには、非日常的な空間への移動、非日常的な時間すなわち休暇などの条件は必要無い。レクリエーションの前段階としてケガレ、あるいは「抑圧された人間の可能性」といったものがあるとするならば、レジャー・レクリエーションは、非日常性によってエネルギーが再獲得される過程であるのに対し、ヨガや気功など東洋的身体観に基づく心身活性化の方法は日常性の中で、身体的な行為を媒体として自分自身を変容させることによって、エネルギーが再獲得される過程であると規程することができる。ただし、非日常性をレクリエーション概念の必須条件に加えるか、加えないかについての検討が、今後の大きな課題となるだろう。

「レクリエーション指導」概念の変遷と展望

○千葉和夫（日本社会事業大学）

園田碩哉（日本レク協会研究所）

レクリエーション指導、レクリエーションワーク

1. はじめに

「レクリエーション指導」なる行為について、学会発表という学際的手段を用いその理論的見解をまとめたのは、これまでに本報告の共同研究者である園田碩哉の「レクリエーション指導の基本構造に関する一考察」¹⁾のみである。この発表は、それまでの多くの抽象的論議に加えて、「レクリエーション指導」行為を「構造的」に捉えながらヴィジュアルな整理を試みた点でたいへん評価されるものと考ええる。

しかしながら、この発表から5年を経過した今日において「レクリエーション指導」なる行為は、従来の領域に加えて医療、保健、福祉、企業・労組、レジャービジネスなどの分野への多様な広がり加加速的に進行してきている。特に国際社会や高齢社会といった動向を背景としたレジャーの量と質の問題は、「レクリエーション指導」に対して新たな機能を要求してきているように思われるのである。

そこで、本報告では先に紹介した園田報告をベースにししながら今一度「レクリエーション指導」概念の変遷を次のようなステージで整理しながら、20世紀を見据えた「レクリエーション指導」の考え方を展望しておきたい。

- ①日本厚生協会のレクリエーション指導概念（戦前）
- ②「指導者検定規程」創設期のレクリエーション指導概念（昭和20年代）
- ③江橋や三隅のレクリエーション指導概念（昭和30年代）
- ④地域と職場レクリエーション領域におけるレクリエーション指導概念（昭和40年代）
- ⑤レクリエーション・ワーク論の登場（昭和50～60年代、平成年代）
- ⑥20世紀を展望して（平成10年代）

2. 日本厚生協会のレクリエーション指導概念（戦前）

日本厚生協会は昭和13年に設立されているが、戦争が激しくなるにつれて厚生運動という活動内容の表現も「慰安娯楽」（略して慰楽）とされ、レクリエーション指導者は「慰楽指導者」と呼ばれている。慰楽指導者は、修練所などを訪れて軍歌や童心行（ゲームのこと）の指導に当たっているのである。²⁾したがって、ここでのレクリエーション指導概念は、戦争で闘っている兵士や戦後で働く労働者への健全な慰安活動の提供であったと考えてよからう。

3. 「指導者検定規程」創設期のレクリエーション指導概念（昭和20年代）

昭和26年に「レクリエーション指導者検定規程」が制定され今日に至っている。そのときに規程を中心となって起草した白山源三郎が、月刊「レクリエーション」第1号で述べている文脈から³⁾、ここでのレクリエーション指導概念には、踊りや歌をレクリエーション的に指導しながら健全なレクリエーションの理念と実践を国民に浸透させていくという国民の「余暇善用指導」というニュアンスを感じとることができる。

4. 江橋や三隅のレクリエーション指導概念（昭和30年代）

江橋は、昭和36年に出版された『レクリエーションハンドブック』の「レクリエーション指導」という章の中で、「レクリエーション指導者は、参加者の興味や欲求、関心を正しく理解し、それを伸ばし、引き出すことを考えるべきであろう。」と述べ、参加者主体のレクリエーション指導概念を打ち出している。⁴¹⁾

また、三隅は昭和37年に出版された『レクリエーション指導』の中で、「レクリエーションの指導とは、変な表現である」としながら、「人々がレクリエーションに対する興味を覚え、また湧きたたされ、生活の中に各自が自分なりにとり入れていくようになれば、それでよいと思うのである。」と、レクリエーションの生活化を導くようなレクリエーション指導概念を提起している。⁴²⁾

以上の両者に見られるレクリエーション指導概念は、レクリエーションの個別的な自由性を踏まえながら、その生活への導入を示唆している点で大きな展開が見られる。

5. 地域と職場レクリエーション領域におけるレクリエーション指導概念（昭和40年代）

昭和47年、日本レクリエーション協会は「レクリエーション運動推進要項」を発表し、その中で、レクリエーション指導者が活動指導に終始することなく、地域の中のクラブに所属したり、あるいは育成したりするよう指針を打ち出した。このことは、活動指導の依頼を待っている指導者ではなく、地域住民のより楽しい生活づくりとしてのクラブライフを支援・育成するという新たなレクリエーション指導概念を提起したものと語る。

一方昭和38年からスタートした日本レクリエーション協会主催の職場レクリエーション指導者養成講習会（通称「レクリエーション学苑」）は、昭和40年頃からレクリエーション指導者を「レク・リーダー」という軽快な感じを抱かせる呼称に変化させている。

つまり地域のレクリエーション指導にはオーガナイザー的機能を要求したのに対して、職場のレクリエーション指導には活動指導により力点を置き、その概念が分化していったように思われるのである。⁴³⁾

6. レクリエーション・ワーク論の登場（昭和50～60年代、平成年代）

日本レクリエーション協会が、昭和49年から行った「高齢者レクリエーション・ワーカー養成セミナー」を契機として、「レクリエーション・ワーカー」論議が活発になり、「レクリエーション指導」の基礎概念も検討されている。この背景には、社会福祉のソーシャル・ワーカー論や江橋らが昭和47年に著した『レクリエーション指導』におけるレクリエーション指導の図示、あるいは、田中が『レクリエーション指導教本』の中で述べたレクリエーション指導の中にカウンセリングやガイダンスをも含むという考え方が存在している。

以上のような過程を経て、昭和55年には日本レクリエーション協会が「レクリエーション指導者養成のための大綱」を発表し、その中でレクリエーション指導は「人々のレクリエーション自立への総合的支援活動」と定義したのである。⁴⁴⁾そして、その方法としては集団を介した支援、個人への直接的な支援、社会システムの整備が上げられている。

7. 20世紀を展望して（平成10年代）

ある個人のレクリエーションの実現を調整・管理（広い意味で）するレクリエーション・コーディネーターやマネージャーという考え方が、レクリエーション指導概念を形成する中心的考え方になってくるのではないだろうかと思われる。

*引用・参考文献は別紙にて紹介する。

ニュージーランドにおける ガーデニングのレクリエーション的価値

杉尾 邦江 武蔵工業大学工学部講師
(株式会社プレック研究所)

(キーワード) ガーデニング

1. はじめに

J・ブノワ・メシャンは、「庭の創造は、余暇の状態にひらめく靈感に想を得た人間の表現への願望の至高の到達段階である。」と述べている。このように、自然や庭や草花、そして風景への愛好と創造への願望は、ほとんど本能的なものである。キーストマスが、言うように、庭は本来個人の果てしない満足の源泉であり、また、思う存分自己表現ができる空間として、特にイギリスで庶民階級に産業革命を前後して、庭作りが大流行した。急激に増加する余暇を庭作りや園芸によって、美と自然の創造のために消費するレクリエーションとして、庭作りは奨励された。この庭の流行は、イギリスから海を渡り、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの植民地に移植された。

レクリエーションとしてのガーデニングは、同時に、町の景観や好ましい環境の創造、更に、地域社会や文化に多大な貢献と効果をもたらしている。

我が国においては、最近、私的空間が公共空間と同様に、良好な環境や景観形成の空間として認識され、私的空間を代表する住宅の外部空間が都市環境の一部として、庭化が要請されつつある。従って、今後レクリエーションとしてのガーデニングの普及が望まれることから、ガーデニングのレクリエーション的観点からの価値と効果について明らかにすることが必要である。従って、世界的にガーデンシティとして認められているニュージーランド、クライストチャーチ市のガーデニングの実態を把握することによって考察を行った。

2. 方法

1987年にクライストチャーチ市において、3000人を対象に質問表郵送によるアンケート調査を実施した。3000人中1396人の回答を得た。アンケートでは得られないディテールは、60人を対象にインタビュー調査を行った。アンケートは25項目にわたり、(1)属性、(2)住居・庭の形状・大きさ、(3)ガーデニングの動機、(4)ガーデニングの実態(作業内容と分担、時間、愛好の度合い)・ガーデンの実態(庭の大きさ、タイプ、構成材料[樹木、灌木、草花、芝、その他の使用度合い])、(5)庭の使用目的、(6)バンダリーの構造、等であり、インタビューでは更に、庭の構造、庭作りを始めた動機を詳細に把握すると共に、庭への趣向として使用樹種、草花の種名と使用頻度、カラーの使用頻度、等で、写真撮影及びビデオ収録、庭の平面図作成を特に庭の最も美しい最盛期の2月に実施した。

3. 結果と考察

(1) レクリエーションとしてのガーデニング

市民の96.7%がガーデニングを行っており、86.4%の人がガーデニングを愛好している。ガーデニングの動機としては、次の9項目があげられ、それぞれ重要と認識している度合いは、表1のように、庭のメンテナンスを目的とする動機は、⑤の町の景観美

表1 ガーデニングの動機

| | |
|-----------|-------|
| ①庭のメンテナンス | 95.9% |
| ②リラックス | 79.3 |
| ③ホビー | 57.7 |
| ④エクササイズ | 49.5 |
| ⑤町の景観美化 | 83.6 |
| ⑥植物への興味 | 77.5 |
| ⑦近隣社会との友好 | 13.0 |
| ⑧社交 | 20.3 |
| ⑨食料の生産 | 64.2 |

化を維持するためと相関が高く、庭は町の景観を形成する重要な景観要素として、住民が認識している事を示すものであるが、一方では、リラックス・ホビー・エクササイズ・植物への興味といった、レクリエーション活動として、ガーデニングを捉えている事が明白である。更に、庭の利用の仕方としては、ガーデニングそのものはレクリエーション的に行うが、庭そのものの使い方としては、庭という空間を環境として捉え、身近な環境として潤いを感じる空間、美しい景観として眺望を楽しむ空間として利用する事が主体であり、スポーツ、ホビーといったアクティビティを楽しむと

表2 庭の使い方

| | |
|----------|-----|
| ①エクササイズ | 38% |
| ②道路景観の修景 | 41 |
| ③景観を楽しむ | 87 |
| ④環境を楽しむ | 91 |
| ⑤戸外生活の場 | 60 |
| ⑥食物生産 | 56 |

いった使われ方には重要としていない事がわかる。

ガーデニングに要する時間量は、1週間の内、1時間以上が73%、4時間以上が40%と、週末の半日はガーデニングに費やす事が、日常的に行われている。

(2) ガーデニングに要する消費額

年間1~5万円を消費するが、約70%に達し、これは、殆どが草花の種子・苗木代等の材料費であり、庭は、殆どすべて彼ら自身の手で作られ、維持管理されている。

(3) ガーデニングの作業内容

ガーデニングの作業としては、①庭のデザイン、②基盤整備（灌水設備・舗装・園路・パーゴラ・テラス・プール・池・花壇の床作り）、③草花の栽培・繁殖、庭木の植栽、手入れ、④芝生の手入れ、⑤動物環境の施設（バードバス、バードフィーダー等の製作）等であるが、これらの作業は、すべて家族で分担して行われる。その分担は、父親は芝生と庭木の手入れ60%、草花の管理は母親が65%、果樹の手入れは祖父が41%の比率で行っている。

(4) 庭の構造と様相

クライストチャーチの庭は、道路に面し、約42%がフェンスがなく、道路から眺められるようになっている。芝生・草花・灌木から構成され、庭で重要とされる植物は、灌木が最も高く91%、次いで草花88%、低木58%で、庶民の庭ほど草花が鮮やかに咲く、芝生と灌木とで構成されたフォーマルなフロントガーデンである。

(5) 属性によるガーデニングの傾向

家庭の主婦、リタイアした人ほど、ガーデニングの時間量が多く、手間のかかる草花を愛好し、高年齢の人ほど、ガーデニングをレクリエーションとして行う傾向にある。

(6) まとめ

クライストチャーチの市民が最も時間を消費するレクリエーションは、ガーデニングであり、そのレクリエーション傾向は、単にホビー、リラックス、エクササイズといった精神的なリフレッシュ効果のみならず、ガーデニングは市域の景観、環境形成に多大な貢献を与えている。ガーデニングは、今後、最も有望なレクリエーションとして普及する事が望まれる。

自然意識 2

塚本 珪一 (大阪薫英女子短期大学)

自然意識 体験 向上 主体性

I. 目的

演者は先に第19回レクリエーション学会で「自然意識」について報告した。その内容は自然への関心、積極性、知識、体力などの関係の概略を示したが、今回はさらに資料を追加し、それらの関係を比較考察した。さらに野外における生活、活動などの体験、学習が体験者をどの様に向上し、主体性をもって活動できるようになるかについても研究テーマとした。

今回はその調査の分析、比較を主とし報告し、向上性の部分についても一部を報告する。

II. 調査方法

使用したアンケートは問題点はかなりあったが、資料の均一性を保つためにあえて前回と同様のものを使用した。アンケートの内容は全体で34の質問があり、(1)積極的な自然の中での活動の有無、(2)身近な自然に対する関心の有無、(3)自然に対する少し高度な知識の有無、(4)体力を必要とする活動の有無の4種別となっている。

別に 1. 今までにあなたが出会ったすばらしい自然は、2. あなたの理想とする自然は、の二項目についての記述依頼も前回と同様である。

分析方法も前回と同様に34の質問に対する回答率と4種別の質問に対する回答率によって分析した。調査対象は前回の資料に加えて、S社野外生活カウンセラー、H専門学園の学生について6ヶ月をおいて二回の調査をした。

アンケート調査に協力をお願いした方々は前回と合わせて900名である。

III. 調査結果

1. 全体的な傾向

前回報告したものとほぼ同様であるが、自然に対する積極性と自然に対する関心、体力を要する事への参加は、ほぼ同様の値を示しているが、自然についての学習の値は低い。

全体的に男女の差はあって、女子が男子に比較して低いこと、特に自然についての積極的な学習と体力的なところでの値が低いのが特徴である。

その差の順位は、自然への関心→積極性→自然の学習→体力的なもの、と大きくなっている。

年齢については細分化しないで、20歳までとそれ以上の二つに分けてみた。

その結果は年齢差は全体的に顕著である。しかし、その傾向は男女に違いがあって、男

子では、自然への積極性→体力的なもの→自然の学習→自然への関心の順に大きくなっているが、女子では体力的なもの→自然への積極性→自然の学習→自然への関心となっている。

2. 各グループの特徴

調査対象としたグループは、①キャンプ実習を希望する女子短大生、②自然について学習しようとする女子短大生、③キャンプ・カウンセラーを希望する社会人、④キャンプ場でカウンセラーをしている者、⑤新人教育の一貫として野外生活カウンセラー研修を受講している者、⑥自然対象の専門学校生、⑦一般社会人山岳会に所属するものなどである。

キャンプ・カウンセラーをやっている者は別として、キャンプをやろうという者とそうでない者との間には全体に幾分差がある。特に自然の学習が前者は後者に比較して高い値をもっている。このことはしかたなく研修を受けようとする者と自分が好んで自然関係の専門学校に入った者との比較において顕著である。

キャンプ・カウンセラーをやっている者のすべての値が高いのは当然であるが、一般社会人山岳会に所属する者との比較では自然の学習と体力的なものは山岳会が高いが、自然への積極性と自然への関心については山岳会が必ずしも高いとは言えない。

3. 向上性

しかたなく研修を受けようとする者と自分が好んで自然関係の専門学校に入った者との比較においてその成長というか向上も顕著である。特に自然の学習が最も顕著で、次に自然への関心→積極的なもの→体力的なものの順に小さくなる。「しかたなく」グループは順位が少し違って、自然への関心→自然の学習→（同様）となっている。

「しかたなく」グループと自然学習希望のグループでは一泊二日のキャンプ実習四回と三泊四日の生徒指導がかせられた。その結果はほとんどすべてに値が高くなっているが、女子の場合は体力的なところでは変化がない。

しかし、研修後の他との比較において、キャンプ場でのカウンセラー・グループには追いついてはいない。

次に実習と講義を専門的に受けたグループでは、一年生の場合は全体に値が高くなり、二年生では自然への積極性は当然変化はないが、なぜか自然への関心が急激に高まる。

IV. 結語

今回、特に問題としたのは実習とか講義を受ける事によって「自然の意識」がいかに変化するかを調査した。しかし、その条件設定はかなり現実の諸条件とは合致せずむづかしいものであった。

最初から自然への学習とか自然の中で活動しようと考えている者にとっては当然であるが「自然の意識」が高まる可能性を持っている。それに対し「しかたなく」の場合はその意識の高まりも低くなっている。

キャンプ経験による児童の自然観の変化 —— 連想法を用いて ——

○中野友博、飯田 稔（筑波大学）、成田修久（IWNC）

キャンプ 自然観 連想法

目的

都市的環境に生まれ育った子どもたちの間に、肉体的分野だけでなく、自殺年齢の低下や無感動、登校拒否など精神・情緒的分野にも劣化現象がみられるようになってきている。こうした状況の中、「野外教育」が自然を舞台に行なわれる教育ということで注目されているが、子どもが自然に対して抱く「概念」そのものの研究がほとんどなされていないのが現状である。そこで本研究は、小学校4・5・6年生に焦点をあて「野外教育」の一環であるキャンプに参加した児童（以下、キャンパーとする）、キャンプに参加しなかった児童（以下、非キャンパーとする）と、自然と接する機会が多いであろうと考えられる山村地区在住の児童（以下、山村児童）の3つのグループを対象とし、それぞれについて、「自然」に対する概念を分析し、キャンプ経験による児童の自然観の変化を明らかにすることを主な目的としている。

研究方法

1. 対象

本研究では研究の対象を①1989年8月に行なわれた幼少年キャンプ研究会主催の花山キャンプに参加した都市部在住のキャンパー（72名）、②非キャンパー（キャンパーの友人で都市部在住 71名）、③宮城県栗原郡花山村立花山小学校の児童（63名）の3つのグループとした。なお対象はすべて小学校4・5・6年生である。

2. 測定及び手続き

それぞれのグループに対して「自然」を刺激語とした「自由連想法」と、「自然」関係語20語についての「制限連想法」を行なった。キャンパー、非キャンパーに対するPRE-TESTは1989年7月、POST-TESTは同年9月に行なった。また、花山小学校の児童に対しては1989年9月に調査を行なった。

3. 統計処理

(1) 自由連想法による分析

刺激語を「自然」とし、それぞれの刺激語に対して、キャンパー、非キャンパーはキャンプの前・後に1回ずつ、花山小学校の児童は1度のみ回答するようにした。回答に際しては、単語や文章を問わず、連想されるものすべてを記述するものとした。

連想された言葉（連想語）について同義語を統一し、連想語の集合とした後、連想頻度を算出、さらに、連想頻度/回答者数×100で与えられる連想率を算出した。連想頻度・連想率に基づき表、図を作成し、比較・検討を行なった。

(2) 制限連想法による分析

本調査では、高田（1976）や阿部（1985）の研究を参考にして「自然」に関する語を20語選出し、それを刺激語として刺激語間の関係を求める制限連想法を行なった。基本的な考え方は刺激語間に類似度と連想確率を導入し、それらの結果を1つの図に重ねて描き、概念構造図を作成することである。まず、制限連想用語の集合を $W = \{W_1, W_2, W_3, W_4, \dots, W_n\}$ とする。全回答者が W_i を刺激語として与えられたとき、 W_k を連想した頻度を U_{ik} とする。また、刺激語 W_i から連想されたすべての連想語の頻度の和を $U_i = \sum_k U_{ik}$ として W_i に属する W_i と W_j との間に互いに連想されやすいという意味での類似度を式 $S_{ij} = (U_{ij} + U_{ji}) / (U_i + U_j)$ で与える。この類似度 (S_{ij}) により、クラスター分析を行なった。また、刺激語 W_i が与えられ、回答者が集合 W の中から W_j を連想するとき、その連想確率 (P_{ij}) を式 $P_{ij} = U_{ij} / U_i$ で与える。以上に述べた規則に従ってグラフの弧を決定するための2つの閾値パラメータ α 、 β を次のように定義して導入する。① $P_{ij} \geq \alpha$ 、 $P_{ji} \geq \beta P_{ij}$ のとき、 $W_i \rightarrow W_j$ ② $P_{ij} \geq \alpha$ 、 $P_{ji} \geq \alpha$ 、 $1/\beta < P_{ij}/P_{ji} < \beta$ のとき、 $W_i \leftrightarrow W_j$ (ただし、 $0 < \alpha < 1$ 、 $\beta > 1$) ③ その他の場合は W_i と W_j の間に弧なし。このことから成る弧と連想語のクラスターを1つの図に重ね合わせて描き、これを概念構造図とし、比較・検討を行なった。

結果および考察

1. 自由連想法による「自然観」

(1) キャンパー

PRE-TESTでは「川」が54%で最も多く連想され、POST-TESTでは「木」が64%で最も多く、「川」は54%のま

までであった。また、PRE-TESTとPOST-TESTに共通してキャンパーの15%以上が連想した言葉は、「木、山、川、緑、森、虫、動物、林、鳥、空気、森林、水、草、花」であった。キャンパーのPRE-TESTとPOST-TESTで10%以上の変化がみられた言葉は「木、山、森、林、キャンプ」でいずれも増加していた。これは、キャンプを行なった場所や、一泊二日の登山を含むキャンププログラムの影響と推測される。

(2) 非キャンパー

「木」がPRE-TESTで64%、POST-TESTで60%を占め、いずれも最も多かった。PRE-TESTとPOST-TESTに共通して15%以上が「木、山、川、緑、森、虫、動物、林、鳥、空気、草、花」を連想した。

(3) 山村児童

山村児童の58%が「川」を連想し、15%以上が「木、山、川、緑、森、虫、動物、林、鳥、草、花、空、魚、紅葉、雲」を連想した。一方、キャンパー、非キャンパーでは、「空、魚、紅葉、雲」という言葉はPRE-TEST、POST-TESTのいずれにおいても15%以下だった。

これらの結果から、都市部在住の児童、山村児童に関わらず小学校4・5・6年生の「自然観」には、「木、山、川、緑、森、虫、動物、林、鳥、草、花」という言葉が含まれていることがわかった。また、住谷(1989)が地域の環境の違いによって生徒の自然観に若干の差が生じたことを報告した結果と一致し、都市部在住の児童の自然観と山村児童の自然観はほぼ似たものとなった。さらに、新堀が「自然の中での生活は短期間であっても自然観を変え、また自然への関心や好奇心を広める」と述べているように、キャンプ経験が子どもの自然観に影響をもたらす傾向があることがわかった。

2. 制限連想法による「自然観」

(1) キャンパー

キャンパーPRE-TESTでは計6つのクラスターがみられたが、POST-TESTでは、水に関係したクラスターと気象・天文に関係したクラスターの2つがみられただけで、その他の言葉は独立していた。これらの結果からキャンプ経験により、小学校4・5・6年生の児童が自然観の中で自然事象を独立させて抱くようになる傾向があることがわかる。これは、新堀が「自然に接する場合、(対象としてよりもむしろ)環境としての自然を考える」と述べているように、本研究のキャンパーもキャンプに参加する前は自然を環境としてとらえていたが、キャンプに参加することによって自然を対象として考えるようになったためと思われる。

(2) 非キャンパー

PRE-TEST、POST-TESTに共通して3つのクラスターがみられた。(水/田畑・土/気象・天文)

(3) 山村児童

山村児童では、計5つのクラスターがみられた。(水/田畑・土/木・森林/草花・野原/気象・天文)

これらの結果から、都市部在住の児童、山村児童に関わらず小学校4・5・6年生の児童はその自然観の中に、水に関係のあるものとして「水」・「川」・「海」を、また気象・天文に関係のあるものとして「空」・「星」・「雲」をそれぞれ同一クラスターとして連想した。弧については、「水」と「川」が相互に連想され、「空」から「星」と「雲」を、「太陽」から「星」を、「人間」から「田畑」を連想している。また、都市部在住の児童は自然観として、「土」から「田畑」を連想するが、山村児童ではそれらを同一クラスターとして連想するものの、言葉には方向性がみられなかった。さらに、山村児童は「川」から「海」を連想するが、都市部在住の児童はその様な方向性を持たないことがわかった。しかし、その他の言葉については違いがみられないため、都市部在住の児童と山村児童の自然観は類似していると考えられる。このことは、自然観は生活環境によって若干の差が生じるがほぼ類似しているという住谷(1989)の報告と一致する。

さらに、キャンパーは、キャンプ経験によって事象をより独立させる傾向がみられた。これは、キャンプを通じて実際の自然物にじかに触れることによって、ひとつひとつの「自然」を自然観のなかで確立する過程にあるため、このような傾向がみられたと考えられる。

結論

本研究においては、キャンプ経験を通して、児童はより具体化した自然を連想するようになる傾向がみられた。都市部在住の小学校4・5・6年生の児童の自然観と山村児童の自然観については、若干の違いが見られるものの、ほぼ類似していた。すなわち、児童の自然観について、地域の環境による影響が少ない。

冒険キャンプ経験が児童の 一般性セルフ・エフィカシーに及ぼす影響

○関根 章文（筑波大学大学院）

飯田 稔（筑波大学）

キーワード：キャンプ、児童、セルフ・エフィカシー

1. 目的

現在、わが国そしてアメリカにおいても、冒険プログラムを含むキャンプの研究としては、自己概念やLocus of Controlを従属変数とした研究が主である（井村，1987）。アメリカのBanduraによって提唱された社会的学習理論では、ある状況において必要な行動を効果的に遂行できるという確信をセルフ・エフィカシー（Self-Efficacy, 自己効力感）と呼んでいる（バンデューラ，重久訳，1985）。そして、個人がセルフ・エフィカシーをどの程度身につけているかを認知することが、個人の行動変容を予測する要因として有効であるとされており、キャンプの研究においても従属変数として有効であると考えられる。

セルフ・エフィカシーには、2つの水準がある。1つは、直面する特定場面において個人が特定の状況を克服しようとするか否かに影響を与える短期的なものであり、もう1つは、個人がいかに多くの努力を払おうとするか、嫌悪的な状況にいかに長く耐えることができるかなどに影響を与える長期的なものであり、後者を一般性セルフ・エフィカシーという。

そこで本研究は、冒険プログラムを含むキャンプに参加した児童を対象に、キャンプの前後に一般性セルフ・エフィカシーを測定し、キャンプ経験による影響を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

1) 被験者

平成2年8月21日から27日に、宮城県花山キャンプ場で行われた幼少年キャンプ研究会主催のキャンプ（6泊7日）に参加した、小学5・6年生48名からなる。

2) キャンプの概要

① 班編成と指導者

参加者は1班6人もしくは7人からなる7班に分けられ、班編成にあたっては性別、学年、経験を考慮した。指導は野外運動を専門とする大学教官および野外運動を専攻する大学院生と大学生があたり、カウンセラーとして各班に1人ずつ配置した。

② プログラム

一般的なキャンプ・プログラムに加えて、班で課題を解決していく仲間づくりゲームやメイン・プログラムである沢登りを含む1泊2日の登山など、冒険プログラムが加えられて構成されている。

3) 調査内容と手続き

坂野と東條(1986)が作成したものを筆者が児童用に修正した16項目、5段階評定尺度からなる一般性セルフ・エフィカシー尺度（以下、GSES）を、被験者に対してキャンプの直前、直後の2回実施した。

3. 結果と考察

キャンプ前とキャンプ後のGSEES得点の平均の差についてt検定を行った。その結果、表1に示す通り、キャンプ前よりキャンプ後のほうが0.1%水準で有意に高く、一般性セルフ・エフィカシーが向上したといえる。これは、冒険プログラムをこなしていく中で、セルフ・エフィカシーを獲得する情報となる1)完全遂行、2)代理的経験、3)言語的説得、4)情動的喚起という経験をしたためと考えられる(Harmon, P. & Templin, G., 1987)。

表1 キャンプ前後におけるGSEES得点の変化(全体)

| | N | pre-test (SD) | post-test (SD) | t |
|----|----|---------------|----------------|----------|
| 全体 | 48 | 50.92 (9.20) | 55.71 (11.43) | -4.07*** |

*** p<.001

キャンプ前のGSEES得点の低いものをL群、標準をM群、そして高いものをH群として比較したのが表2である。L群とH群はキャンプ前後で有意な向上はみられないが、M群は1%水準で有意な向上がみられた。また、キャンプ前にはM群とH群の間に有意差があったが、キャンプ経験によってM群がH群と同程度まで向上したことにより、キャンプ後には有意差がなくなった。L群のGSEES得点が向上しなかったのは、無気力・無関心・無感動であったり、また抑うつ状態が強い(坂野, 1989)がため、プログラムに積極的に参加しなかった可能性がある。一方、M群とH群はプログラムに積極的に参加したために、キャンプ後にGSEESを高く示したと考えられる。

表2 キャンプ前後におけるGSEES得点の変化(L・M・H群別)

| | N | pre-test (SD) | post-test (SD) | t |
|----|----|---------------|----------------|---------|
| L群 | 14 | 40.79 (8.51) | 45.43 (12.40) | -1.69 |
| M群 | 18 | 50.94 (1.43) | 57.78 (7.89) | -3.77** |
| H群 | 16 | 59.75 (4.57) | 62.38 (7.38) | -1.67 |

** p<.01

キャンプ未経験群と経験群に分けて比較したのが表3である。キャンプ前には未経験群と経験群に有意差がみられなかったが、キャンプ後には、経験群が0.1%水準で有意な向上をしたために、両群間に有意差($t=-2.39, df=46, p<.05$)がみられた。これは過去のキャンプ経験が、今回のプログラムに積極的に参加する要因になっていることが考えられる。

表3 キャンプ前後におけるGSEES得点の変化(経験別)

| | N | pre-test (SD) | post-test (SD) | t |
|------|----|---------------|----------------|----------|
| 未経験群 | 15 | 47.53 (9.70) | 50.13 (12.87) | -1.73 |
| 経験群 | 33 | 52.45 (8.68) | 58.24 (9.91) | -3.73*** |

*** p<.001

4. 結論

冒険キャンプに参加した児童は、キャンプ・プログラムをこなしていくなかで、一般性セルフ・エフィカシーを獲得し、向上していくことが明らかになった。特に、キャンプ前的一般性セルフ・エフィカシーの状態やキャンプ経験によって、向上に影響がある。今後、他の従属変数との関係、行動変容との関係、そして個々のプログラムとの関係について明らかにする必要がある。

キャンプに対する高齢参加者の意識

－ キャンプ参加高齢者の不安を中心として －

○中島一郎（国際武道大学）

篠田基行（国際武道大学）

キーワード：高齢者，キャンプ，意識，不安

はじめに

国際連合では「高齢者」を65歳以上、その国の総人口に占める高齢者人口の割合が7%を越える社会を「高齢化社会」と定義している。わが国は、高齢者人口が総人口の12.0%を占め、2025年には26.55%（3.76人に一人）に達し世界一の水準に達するという予測報告も出されているように、歴史上かつて経験したことのない超高齢化社会へと向かってあらゆる領域・分野での対応が必要とされている。

一方、こうした高齢者対策の一貫としてのレクリエーション領域からのアプローチが各方面において試みられているが、特にキャンプに焦点を当てた報告例は極めて少ないのが現状である。幼・青少年を中心としたキャンプ効果が科学的にも数多く立証されつつあるだけに、高齢者に焦点を当てたキャンプについても今後更に検討してゆく必要があり、高齢者問題の観点からも非常に意味があると思われる。

そこで本研究では、高齢者がキャンプに対してどのような意識を持っているのかを特にキャンプ参加への不安を中心として分析することにより、高齢者を対象としたキャンプを今後実施してゆく上での基礎資料を得ることを目的とする。

方法

- 1) 対象：千葉老人大学健康指導教室参加者 80名（男：38名，女：42名）
※統計上、参加者を60～64歳群（26名：32.5%）、65～69歳群（38名：47.5%）、70歳以上群（16名：20.1%）に分類した。
- 2) 期日：平成2年8月9日（木）～10日（金） 1泊2日
- 3) 場所：千葉県立海上キャンプ場（千葉県海上郡海上町岩井）
- 4) キャンプ概要：スタッフは健康指導教室スタッフを中心に構成され、参加者は男女混合の7～15名の計10班で構成された。キャンプは、野外炊事・テント泊を中心とする原始的キャンプ（Primitive Camp）の形式で行なわれ、主なプログラムは、ゲーム、フォーク・ダンス、レク・ダンス、キャンプ・ファイヤー（キャンドル・サービスを含む）等であった。
- 5) 調査方法：オリエンテーション時に、アンケート形式による質問紙法を実施
- 6) 調査項目：性別、年齢、過去のキャンプ経験、キャンプへの興味度、キャンプ参加への積極度、キャンプ参加への不安度、不安の具体的内容（身体面、精神面、生活面、人間関係面、その他）
※「不安の具体的内容」のみ記述式で回答を求め、他の項目は選択肢で回答を求めた。
- 7) 分析方法：第一次集計→各設問の単純集計を整数及びパーセントで算出
第二次集計→各設問間のクロス集計を整数及びパーセントで算出

結果

1) キャンプ経験

全体では、「生まれて初めての経験」(43名:53.8%)が過半数を占め、次いで「ずっと以前に何度か経験」(25名:31.3%)、「最近10年以内に経験」(12名:15.0%)の順となっていた。男女別では、「生まれて初めての経験」の割合が女性では2/3強を占め、男性の2倍近くを占めていることが特徴となっている。年齢別では、何らかのキャンプ経験のある者の割合が70歳以上群で他とは逆に過半数を占めていることが目を引いた。

2) キャンプに対する興味度

全体では、興味派(「おおいに興味あり」+「興味のある方」)が56名(70.1%)と大きな割合を占めたのに対し、興味無派(「まったく興味なし」+「興味のない方」)は11名(13.8%)であった。男女別では、男性の興味無派の割合が女性を大きく上回っていることが特徴となっている。年齢別では、年齢が上がるに連れて興味派の割合が大きくなっていることが目を引いた。

3) キャンプ参加への積極度

全体では、積極派(「おおいに積極的」+「積極的な方」)が46名(57.5%)と過半数を占めたのに対し、消極派(「まったく消極的」+「消極的な方」)は16名(20.0%)であった。年齢別では、70歳以上群の積極派の割合が1/3強とかなり低い値になっていることが目を引いた。

4) キャンプ参加への不安度

全体では、不安派(「おおいに不安」+「不安な方」)の24名(30.1%)に対し、不安無派(「まったく不安なし」+「不安ではない方」)が43名(53.8%)と過半数を占めた。男女別では、女性の方が全体的に不安度が高い傾向にあることが特徴となっている。年齢別では、70歳以上群で不安無派の割合が過半数をかなり下回ったことが目を引いた。

5) 不安の具体的内容

身体面では、血圧障害や眼病、腰痛などの既往症状からくる不安が主流となっており、体力や傷害についての不安は一つもあげられていなかった(20名:25.0%)。

精神面では、ただ漠然としたキャンプへの不安があげられていた(3名:3.8%)。

生活面では、環境の変化やテント泊による寝不足への不安や、カロリーや味付け、好き嫌いなどの食事に関する不安が主流となっていた(20名:25.0%)。

人間関係面では、社交性のなさや人間関係が苦手などの自分自身に起因する不安が主流となっていたが、老人には変わり者が多いから心配だという他者に起因する不安もあげられていた(10名:12.5%)。

その他の不安では、暑さや害虫、救急施設面での不安があげられていた(6名:7.5%)。

まとめ

本報告で対象とした高齢者は、老人大学健康指導教室への入学が認められたという時点で既にある程度以上の健康を有しているということが前提となっており、これはキャンプ参加条件の重要な要素ともなっている。その意味でキャンプは、多様な状態にある高齢者の中の限られた層に対してのものという限定を受けている。また今回のキャンプでは、事前にある程度の人間関係ができていう前提条件も含まれている。その故今回得られた結果については、これらの前提条件を踏まえた上で検討してゆく必要があり、キャンプ経験による高齢者への効果を含めた総合的な研究に今後発展させてゆくつもりである。

神奈川県における盲人卓球

—— 練習を支援するボランティアを中心に ——

渡辺文治（神奈川県総合リハビリテーションセンター 七沢ライトホーム）

視覚障害者 盲人卓球 ボランティア

はじめに

近年、障害者のスポーツ・レクリエーションが社会的に認められるようになり、視覚障害者（以下視障者と略す）の間でもさまざまなスポーツが行なわれるようになった。特に盲人卓球（以下盲卓と略す）は競技人口も多く定期的に練習を行なっているグループも多い。視覚障害者が何らかの活動を行なう際に重要なのが晴眼者のボランティアである。盲卓の場合では視障者の移動や練習の相手、コーチなど晴眼者が必要になる場面は多い。しかし、点訳（点字の本の製作など）や録音、誘導などのボランティアの養成は盛んに行なわれているがレクリエーションやスポーツに関してはまだ不十分な状態である。今回神奈川県内で行なわれている盲卓の状況を明らかにするために各練習グループへの参加者（視障者とボランティア）にたいしてアンケート調査を行なったのでその結果を報告する。

調査の概要

- 1 調査時期 —— 1989年11月～12月
- 2 調査方法 —— グループごとにアンケート用紙（墨字）を配布
- 3 調査対象 —— ①県内で練習をしているグループ ②参加している視障者
③練習を手伝っている晴眼者、ボランティア
- 4 調査項目 —— 調査の項目が多岐にわたるので今回の報告に関する項目のみ
①グループに対するもの（省略）②視障者に対するもの（省略）③ボランティア
に対するもの（性別、年齢、居住地、職業、年数、動機、ルール、練習相手等）

調査結果と考察

表1 回答者数

| 性 | 視障者 | 晴眼者 |
|---|-----|-----|
| 男 | 26 | 7 |
| 女 | 36 | 36 |
| 計 | 62 | 43 |

表2 年代別参加者

| 性 | 晴眼者 | | | 視障者 | | |
|------|------|------|------|------|------|------|
| | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
| 10代 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 20代 | 2 | 0 | 2 | 1 | 0 | 1 |
| 30代 | 3 | 2 | 5 | 2 | 3 | 5 |
| 40代 | 0 | 12 | 12 | 9 | 6 | 15 |
| 50代 | 1 | 13 | 14 | 14 | 8 | 22 |
| 60代 | 1 | 8 | 9 | 8 | 6 | 14 |
| 70代 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 3 |
| 80代 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| 平均年齢 | 39.9 | 50.6 | 48.8 | 54.7 | 53.2 | 53.8 |

神奈川県内で定期的に盲卓の練習をしているグループは9つある。今回のアンケートではこのうち7つから回答を得た。表1に回答者数を示した。また、表2に参加者を年代別に示した。視障者・ボランティアともに女性が多く特にボランティアでは80%をこしている。年代を見るとどちらも40～60代の参加者が多い。多数を占める女性の平均年齢は視障者53.2、ボランティア50.6となっている。全体の平均年齢も高く盲卓は比較的高齢者を中心とするスポーツであることがわかる。なお、ボランティアの平均参加年数は男4.6年、女2.6年、計3.0年である。男性は参加者は少ないが参加年数は長い。女性は1年未満（7名）が多く参加年数

表3 晴眼者の居住地

| | 男 | 女 | 計 |
|-----|---|----|----|
| 横須賀 | 2 | 8 | 10 |
| 厚木 | | 10 | 10 |
| 鎌倉 | | 7 | 7 |
| 横浜 | | 6 | 6 |
| 相模原 | 3 | 2 | 5 |
| 綾瀬 | | 2 | 2 |
| 藤沢 | 2 | | 2 |
| 逗子 | | 1 | 1 |

表4 晴眼者の職業の有無

| | 無 | 有 | その他 | 不明 |
|---|----|---|-----|----|
| 男 | 1 | 5 | 1 | 0 |
| 女 | 29 | 4 | 1 | 2 |
| 計 | 30 | 9 | 2 | 2 |

表5 晴眼者の参加の動機

| | 男 | 女 | 計 |
|--------------|---|----|----|
| 障害者スポーツに関心あり | 4 | 8 | 12 |
| 頼まれたので | 2 | 18 | 20 |
| その他 | 1 | 7 | 8 |

表6 どの程度ルールを知っているか

| ルールについて | 男 | 女 | 計 |
|----------|---|----|----|
| よく知っている | 5 | 2 | 7 |
| 練習程度 | 2 | 26 | 28 |
| ほとんど知らない | 0 | 4 | 4 |
| その他 | 0 | 1 | 1 |
| 不明 | 0 | 3 | 3 |

表7 練習の相手ができるか

| | 男 | 女 | 計 |
|--------|---|----|----|
| できる | 5 | 16 | 21 |
| 少してできる | 2 | 18 | 20 |
| できない | 0 | 1 | 1 |
| 不明 | 0 | 1 | 1 |

おわりに

今回の調査で盲卓、特にボランティアの実態が明らかになった。視障者のスポーツには卓球大会の開催、審判・コーチのできるボランティアの養成が重要である。神奈川県では毎年身障スポーツ指導者養成の講習を行なっている。しかし、今回の調査では実際に練習などの日常活動を支援するボランティアは地域や他のボランティア活動のなかから育っていることを示している。養成講習をする際に考えなければならない問題である。

(参考文献)

渡辺 他「中途視覚障害者の余暇時間」レクリエーション研究第14号 1985

渡辺 他「神奈川県における盲人卓球」第3回ロービジョン研究会 1990

は少ない。

表3にボランティアの居住地を示した。拠点となる体育館や建物のある市の周辺が多く練習が盛んな場所にはボランティアも多い。

表4に職業の有無を示した。視障者、ボランティアともに男性では有職者が多いが女性には無職者が多い。

表5にボランティアが盲卓に参加した動機を示した。参加の理由は「頼まれて」という回答が多く、「その他」のなかにも「ボランティアをしていて」や「介助していて」という回答が6名あった。これは地域のなかで日常的に接触しているなかから協力者が生れてくることを示していると考えられる。

表6にボランティアがどの程度ルールを知っているかについて示した。男性は70%がよく知っていると答えているが女性では5%にすぎず、全体では16%でしかない。ただし、練習の相手ができる程度には知っているというのが65%、女性では72%で日常の練習にはほとんどの人が不自由していない。しかし、日常の練習の際に審判ができる程度にはルールを学習する必要があるだろう。なお、長期間関わりを持っている人にはルールをよく知っている人が多いが長い人がかならずしもよく知っているわけではない。

表7に練習の相手ができるかどうかについて示した。細かなルールについては良くわからなくても何とか練習の相手はできるという人が多い。

生涯学習社会に向けての 生涯学習システムとしての地域生活文化

—山形・黒川能を支える人々の生活史研究をモデルとして—

梅澤佳子（日本航空レジャーライフ研究所研究員）

キーワード：生涯学習・地域生活文化

1. はじめに

人生80年時代を迎えて、「生涯学習」「生涯学習社会」という言葉がクローズアップされてきている。これらの概念は従来の社会教育とどう違うのだろうか。これまで「生涯教育」という概念が使われてきたが、生涯教育と生涯学習をどうとらえたらよいのだろうか。

従来の生涯教育は、学校教育＋社会教育と考えられてきた。しかし、今日言われている生涯学習は、これまでの生涯教育と次の点で基本的に異なると考えられる。第1に人生50年時代は、労働に対応する能力開発に重点がおかれてきたが、これからは労働の能力開発に加えて自由時間に対する能力開発も重要になってくる。次に人生80年時代においては、労働時間は人生の1割まで短縮し、自由裁量時間は3割まで拡大するといわれている。¹⁾生活時間構造が変化してくると、これまでのリニア型のライフパターンからリカレント型のライフパターンへの選考が強まってくる。²⁾第3に、生活時間構造が変化してくると国民一人一人にとっても、仕事の能力開発に加えて自由時間を充実して生きる能力開発が重要になってくる。第4に、一般に自由時間の過ごし方として、休息・休養型、気晴らし・娯楽型、自己開発型があると言われているが、³⁾⁴⁾どのライフステージにおいても、自己開発型に対する国民のニーズが高まってきており、それに答える新しい学習支援システムを整備することが急務となってきている。以上のような変化を捉えて、文部省は昭和63年に社会教育局を生涯学習局に改め、明治以降からみると3回目の大きな教育の革新をはかろうとしている。¹⁾²⁾経済企画庁国民生活局：『人生80年時代における労働と余暇』

生涯学習社会に向けての生涯学習システムを整備するには、まず人生80年それぞれのライフステージにおいて、自己開発をはかれるような支援システムを作ることである。そして、学校教育もその中に位置付けられるべきものであろう。従来の所与としての学校教育に、公民館活動を中心とした社会教育を付け加え、それを生涯教育とするのではない。人生80年全体の生涯学習支援システムが整備されるべきである。人生80年にわたってどのような生涯学習支援システムが望ましいのだろうか。今後この課題に向けていろいろな視点からの調査研究が行なわれることになると思うが、私は日本的な生涯学習のあり方を探るために、1つの事例研究から入ることにした。³⁾⁴⁾アリストテレス・J.デュマズディエ

2. 山形・黒川能の事例研究

山形県東田川郡櫛引町黒川は、山形県の日本海側に面する庄内平野の南部に位置する。東に鳥海山、そして羽黒山・月山・湯殿山を含む出羽山脈に囲まれ、自然に恵まれた土地である。また古くから都との交流が盛んであり、山岳宗教でも信仰の深い文化的な環境にある。その黒川は約500年にわたって伝統芸能（黒川能）を伝承し続けている。黒川能は春日神社の宮座を兼ねた上座・下座、2つの座の人々によって演じ継がれてきたものである。彼等は専業能楽師ではない。農村の人々が氏神様である春日神社への信仰を支えに、彼等の生活の中で伝えてきた地域生活文化である。現在では歳時季にあわせて年に6回の

演能が行なわれている。それは奉仕・奉納と、近郊地域の普及を目的としたものがある。その中で最も重要な祭りは、2月1日から2日(旧正月)にかけて行なわれる王祇祭りである。春日神社からご神体の王祇様を2つの座の当屋にそれぞれお迎えして、王祇様、当屋の当人、村人が集まり、夜を徹して行なう祭りである。祭り独自の精進料理が用意され酒を汲み交わしながら、能楽が演じられる。黒川は両座あわせて400番以上の演目を持っている。その中からその年の祭りの演目が選ばれ、敵しい稽古の後に役者たちによって演じられる。そして老若男女、すべての村の人々によって享受されるのである。王祇祭りの儀式は、1月3日の興行から始まる。しかし祭りの準備は、その年の王祇祭りがつつがなく終わった翌日、来年の当屋に引き継がれた時に、既に始まっているのである。山菜採り、花作り、薪割り等、祭りの準備は1年を通して行なわれるのである。

3. 黒川の生活史から

出羽の国の人々の生活は、出羽三山の山岳信仰を抜きにしては考えられない。空海によって真言宗が開かれた羽黒山・月山・湯殿山の三山は、過去世、現世、未来世を救う仏様の山である。我々は後悔に満ちた日常の生活を清算し、生まれ変わることができる。そんな死と再生の山々である。出羽の国は、このような神々に守られていた。そして人々の1年間のサイクルも、この山岳宗教の祭事にあわせてできていたのである。一方で出羽の国が、庄内平野有数の穀倉地帯であったことを忘れてはならない。この経済的な豊かさが、物質的なものばかりを求めるのではなく、より豊かな生活を送るためには文化の享受が大切であることを受け入れるゆとりを生んだのである。

黒川は、この豊かな文化的背景、経済的基盤をもつ出羽三山のまさに懐に位置する地域である。黒川能を伝承してきた地域の人々の心の中には、出羽三山の仏様(神々)に支えられているという思いがある。*この宗教心の潜在的な支えが、能を500年にわたって存続させてきた原動力であったといえる。能を存続させてきたのは、地域の人々一人一人である。「能をやる」という事が地域のアイデンティティであり、自分自身のアイデンティティを確立するという事でもある。*

さらに黒川の伝統芸能である「能楽」そのものに、深めていく価値がある。能の番組にはそれぞれに人間味の込められたストーリーがある。能というフィクションの世界に身をおき、その世界が深まると、人生における能の意味がわかってくる。また能を演じることで、能の享受は個人のレベルをこえて、村での共通の楽しみになっていくのである。*

4. まとめ

王祇祭りは黒川における「ハレ」の舞台である。この日のために「真面目」な日常生活に励む。そして日常から切り離された祭りの舞台で日々稽古を積んだ自分を出しきる。それは仕事や学校で勉強をする日常の自分とは異なったもう一人の自分である。フィクションの世界でさまざまな疑似体験をし、違った自分が引き出される。これが人間性を深める、人間が全体に向かうということであろう。そして「もう一人の自分」を开花させた思いが、日常のあり方をも包み込む。それは自分自身にとっての価値ばかりでなく、地域全体の支えにもなる。豊かな文化的背景、経済的基盤のもとに、村の人々が「能楽」という普遍的な価値に根ざした文化の世界の中で自己開発していく。このような地域生活文化こそが、これからの生涯学習社会に向けての支援システムのあり方の有効なモデルといえるのではないだろうか。

*印は、学会発表時に生活史の中から事例を紹介する。

転換期における国民体育大会の 意義と役割に関する調査

—特に生涯スポーツの振興事業としての観点から—

○鴨井 啓 (大竹総合科学専門学校)
原田宗彦 (大阪体育大学)

生涯スポーツ スリム化 転換期

緒言

1946年、京都で第一回大会が開かれた国民体育大会はわが国のスポーツ振興事業の核として、競技スポーツの制度化と公共スポーツ施設の整備拡充において重要な役割をはたしてきたことは認めなければならない。しかしながら全国を一巡する過程において運営費の肥大化や、開催県連続優勝等の競技運営システムの形骸化といった問題が表面化し、国体のあり方についての批判が各方面から持ち上がっていることも事実である。

二巡目に入った京都国体は、そのような批判に対処すべく、自治体主導で初めて国体改革を提唱、1982年には、開催県連続優勝の温床となっているフルエントリー制の廃止を盛り込んだ7項目の提言を行ない、また華美にならぬよう、「みなおし・みんなで・まごころで」という3本柱の頭文字をとり「3M(スリム)国体」と名づけ、歓迎もレセプションやみやげ物の廃止などの簡素化を促進したものの実際にはフルエントリー制の廃止案は消え、成年2部制の導入や得点方式の簡略化などが改革案に盛り込まれるにとどまった。

さらに翌年の1989年に開かれた北海道国体は、地域の活性化・スリム化定着・生涯スポーツの振興を実施目標とし、新しい国民体育大会を明確にしようとする試みに力が注がれた。これは、各種スポーツを通して国体への間接的参加を呼びかけたもので、地域スポーツの輪を広げ、国体後も生涯スポーツの振興を継続することに狙いを定めている。

二巡目以後の国体では、このように従来のある方を改善しようとする様々な改革案が実施されてきたが、実際にはそれらが十分に達成されたとは言い難く、解決すべき多くの問題が残されている。

これまでに国民体育大会に関して日本体育学会で発表された数少ない先行研究では、滋賀国体をテーマとして住民への質問紙調査を実施してきた岡本らの一連の研究がある、彼らは滋賀国体が正式決定となった1978年、開催直前の1980年、そして開催直後の1981年と3回にわたっての時系列調査を行なった。これ以外にも浪越らが、国体開催によってつくり出される生活・スポーツ環境・地域住民のスポーツ・ニュースに関する実態調査を実施したり、川村らが、わかくさ国体における集団演技に参加した婦人の参加活動に着目し、女性の生涯スポーツ参加に関する考察を行なった。

本研究では、一巡目から二巡目の転換期にある国体に焦点をあて、国体直後に実施した住民に対する意識調査を比較することにより、変化を見せる国体の役割を縦断的な視点から分析することを目的とする。対象とした国体は、一巡目の最後であった沖縄国体(1989)とそれに続く京都国体(1988)及び北海道国体(1989)である。またそれぞれの国体において住民の意識調査から得られたデータを(1)国体開催による成果、(2)国体開催への批判、そして(3)生涯スポーツの振興といった3つの論点から分析した。

研究方法

本研究では、沖縄には郵送法による質問紙調査、京都並びに北海道には留置法による質問紙調査を実施した。なお分析方法は調査データの性質上、複雑な解析を避け2元クロス表による国体の比較をおこなった。

結果及び考察

1. サンプルの属性比較

沖縄県及び京都府、そして北海道の有効標本数ならびに回収率は、それぞれ790部(73.1%)577部(57.7%)936部(69.3%)である。また回答者の男女比は、3地域とも女性の割合が男性の割合をやや上回っている。平均年齢に関しては、3地域ともサンプルを地元の中・高校生とその両親、あるいは家族に限定したため、平均年齢は非常に似かよっている、それゆえ人口学的変数から見た場合、サンプルはかなり特質であると仮定することができる。

2. 国体開催による成果

調査ではまず最初に、国体開催の成果として体育・スポーツ施設の整備について質問を試みた。

3国体における地域住民の中では、沖縄県・京都府では約7割が「そう思う」と答えているのに対して北海道は約5割が「そう思う」と答えているのにとどまっている。実際京都では、250万人という人口に対して公共体育施設が10ヶ所未満であったものが、今回の国体を契機に全国でも「中の上」まで押し上げられた。また、京都と共にスポーツ施設が貧困であった沖縄も、施設設備費に547億円を費やしスポーツ施設を充実させた。これらに対し北海道では96施設のうち、新設43、改修8、残る45施設は即設施設を使用した。

これらの数字は、それぞれの国体に使われた施設設備費に比例し、これらの補助に対する地域住民の意識の高さを物語っている。国体はスポーツ環境を充実させると共に、競技レベルの向上に役立つことが知られている。各道府県の住民に対する競技レベル向上に関する質問では「そう思う」と答えた住民は沖縄(71.2%)が京都(51.9%)北海道(44.9%)を大きく上回っており、一巡目の最後である沖縄と京都・北海道における意識の差が明確になった。

3. 国体開催への批判

経費に関する意見では、それぞれが「そう思わない」という肯定的な意見が「そう思う」という否定的な意見を大きく上回っている。特に沖縄県では、「そう思わない」と答えた人が全体の半数近くにのぼり、京都府・北海道に比べ、この大会の経費を費やすことについて、あえて否定しない人が多いことがわかった。ただ実際の経費の使われ方になると、顕著な差があらわれる、例えば道路整備に関する意見であるが、県をあげて国体事業に取り組んだ沖縄と、「スリム国体」として経費の節減を目指した京都府、スリム化の定着を目指した北海道の差が数字になってあらわれている。すなわち沖縄では、回答者の77.2%が道路が整備されたと感じており、京都では57.4%、北海道ではさらに低く29.2%にとどまった。これらの数字は京都・北海道側の経費節減の努力がかなりよく住民に理解されている様子がうかがえる。

4. 生涯スポーツの振興

二巡目のトップであり新しい方向性を打ち出した京都国体は、一般市民を対象としたスポーツの普及と振興にも力を注いだ。

「自分自身スポーツに対する関心が高まった」という質問に対し、京都府民の40.9%が「そう思う」と答えている。この数字は沖縄の13.0%に比べてかなり高く、京都国体がスポーツ振興にかなりの成果をあげている事実が明らかとなった。しかし、同様に生涯スポーツの振興を目標とした北海道は25.8%と沖縄は上回ったものの京都には全く及ばない数字となった。これは、先にあったスポーツ施設に関連しているのではないか。

スポーツ振興に力を注いだ京都府と北海道を対象として「スポーツ・フォア・オール関連用語に関する認知度」についての質問を試みたがいずれの用語においても、認知度の低さが目立つ。特に「社会体育」については70%以上の住民が「生涯スポーツ」についても京都62.1%、北海道52.5%が「知らない」と答えており、特にスポーツ振興行政における広報活動のたち遅れが指摘される。国体直後でスポーツに対する関心が高まっている時期に、集中的なプロモーション活動を効率よく効果的に展開すれば、国体後のスポーツ参加を大幅に伸ばすことが可能となると思われる。

「歩くスキー」の概念の明確化に関する一考察

○ 三浦 裕 (北海道教育大学)

長屋 昭義 (旭川大学女子短期大学部) 小川 幸次 (北海道東海大学)

キーワード: 歩くスキー、概念、内包、外延

【 1. 問題の所在および本稿の課題 】

近年「歩くスキー」は手軽なスポーツとして普及してきている。この言葉は体育・スポーツ用語辞典においては見あたらず、定義がなされていないため、現在のところテクニカルタームとして確立されてはいない。このため「歩くスキー」についての概念が不明確なまま、「歩くスキー」というスポーツ活動が展開されている一方で専門領域における研究対象ともされているのが現状である。したがって今後の「歩くスキー」研究の方向を決定する上で、「歩くスキー」についての概念を明確にすることは必須かつ急務な課題である。

【 2. 研究の目的 】

ある概念が不明確な状況において、その概念を明らかにしようとする作業のもつ意味は、唐木 (スポーツの概念、不昧堂) が述べるように、不明確な概念が用いられている現状の批判・変革、科学的な認識の深化である。しかし、概念を明確化することのみにより、関連する全ての問題が解決され得るわけではない。これまでに「歩くスキー」に関しては、いくつかの概念化が試みられているが、いまだ共通した認識はなされていない。このため本稿においては、一連の「歩くスキー」研究を進める上での一つの段階として、概念という視点から分析し、「歩くスキー」の概念の明確化を試みた。

【 3. 研究の方法 】

ある概念を明確にする場合には、いくつかの方法が考えられるが、「歩くスキー」の概念が不明確な現状であるため、本研究では「歩くスキー」自体の概念の内包と外延を明確にする方法を用いた。概念 (言葉の意味内容) は、内包 (その概念の本質的諸特性の総体) および外延 (その適用範囲) で構成されている。本研究では「歩くスキー」のとりえが記述されている文献を基に、「歩くスキー」の概念の内包・外延について分析・検討を行い、理論枠としての概念化を試みた。対象とした文献は、歩くスキー関連文献143 (1989年、北海道体育学会) のうち、概念の明確化に有効と思われる著書および報告書、計11である。

【 4. 概念の枠組みの設定 】

「歩くスキー」についての明確な定義 (概念の内包を明示的に規定すること) が存在していない状況は、この概念の内包と外延とが未整理であることを示唆している。このため、「歩くスキー」の概念の明確化を図るためには、ある枠組みをもって内包と外延を整理する必要性が生じる。そもそも概念とは、人々が存在対象をよりよく把握するために、主体的に作り出す理想的モデルであり / その形成過程には明らかに後天的な学習経験が関与している / したがって条件により同一概念の内包は変化する (市井三郎、社会科学大事典、鹿島研、1970)。このため本稿では「歩くスキー」という言葉が提唱され始めた背景に存在する思い (性質づけ) を内包の共通する理論的な枠組みとして設定した。今村 (文献参照) は、当時流行していたスキー現象を競技・技術偏重、環境偏向 (時間・交通・場所)、経済性などから、人々の環境生活に関係なく存在している画一的なスキーとしてとらえた。そしてこれらを背景 (現状批判) として、冬の自然的環境における主体的・自主的活動の

場を通して、健康で豊かな人間生活を生活環境の中に求めようとする「歩くスキー（現状変革）」を理念型において提唱した。したがって、これらを整理すると内容的に重複するものの、内包の枠組みを大きく非競技性、日常性、経済性、環境、健康として設定することができる。なお、ここでは外延の枠組みを他の類似したスキーへの適用範囲とした。

【 5. 結果と考察 】

《内包》「速さを競うものでもないし、他人と競技するものでもない(対象文献 3.以下同様)」などに非競技性の観点をみることができる。これは競技との区別、あるいは競技性の非存在や貧弱さの意味であり、「歩くスキー」が競技を目的とする性質のスキーではないことを示唆している。日常性は「自分の生活の中で、いつでも、どこでも、誰でも手軽にできる(3.)」ことを意味し、「気楽に散歩にでるような気持ちで、雪の山野を散策するスキー(8.)」という文章がこれに相当する。この枠組みは、日常の生活環境に対応したスキー形態を重視していると言えよう。「アルペンスキー用具より値段はずっと安く・・・リフト代もかからない(6.)」などは、他のスキー形態よりも「歩くスキー」が経済性に優れている点を指摘している。この枠組みは一般市民への普及という観点においても重要な点であると同時に、「歩くスキー」が機械力を利用しない自然という場でのスポーツであることも意味している。環境は、その言葉の意味する内容は広いが、ここでは「いつ、誰でも、どこでもできる歩くスキーは、いわゆる“作られたスキー場、などを必要としない(3.)」という文章にみられるように、主として自然環境・施設・交通・用具などを対象としている。また「平地・丘陵など冬の自然の横の空間を利用するスキーである(11.)」というように、スポーツ空間もこれに含まれる。健康面について端的に表現しているのは「主として身体と精神を高揚させる健康分野のスキー(8.)」という文章であり、またこれに加えて社会的な面としては「グループや家族でも楽しめる(8.)」などを挙げることができる。《外延》「スキーラングラウフなど、まちまちの名称が使われているがそれらを総称して歩くスキー(10.)」とその適用範囲の広い枠組みもあるが、「ある目的を持ったそれぞれ異なったスキーである(1.)」というように、「歩くスキー」と他の類似したスキーとは同一ではない、とする枠組みをもつものが多い。したがって全体的としては適用範囲が狭く、外延量は少ないということになる。一般に内包が多くなると外延は少なくなる(前掲書)。

【 6. まとめ 】

以上のことから、「歩くスキー」の概念についてまとめると、「歩くスキー」とは『いつでも、どこでも、だれでもが、手軽に、一人でもまた家族や友人などと一緒に、歩きやすい安価な用具を用いて、しかも他人とタイムを競わず、自然と親しみながら体力の向上や健康の維持、さらに楽しみなど冬季の生活を豊かにするために、野外の雪上を歩いたり、滑走したりする自己発見の身体文化である』、ととらえることができよう。

【 対象文献 】 1.北海道教育大学旭川分校寒冷地体育研究会 歩くスキーの理論と実践 同研究会 1974, 2.北海道他 歩くスキーガイド・ブック 同左 1976, 3.今村他 歩くスキー 北海タイムス 1976, 4.丸山庄司 歩くスキー入門 大修館 1979, 5.佐藤隆他編 学校スキーの計画と指導 第一法規 1976, 6.浮田義巨 歩くスキーのすすめ どんねこ書房 1989, 7.ヨコヤマ・ノルディックスキー・スクール 歩くスキー 成美堂 1980, 8.(財)全日本スキー連盟 日本スキー教程 スキージャーナル 1986, 9.同左 日本スキー指導教本 1984, 10.同左 1987, 11.同左 スキーと安全 1987.

100キロハイクに関する研究

○佐藤初雄（国際自然大学校NOTS）

困難体験・若者・高い完歩率

1. はじめに

近年、我が国では、マラソン・トライアスロン・バイアスロンなどの過酷なスポーツイベントが各地で開催されている。あまり一般的ではないが、その中に百キロハイクがある。私はこの100キロハイクに1986年に出会い、以来5年間関わってきた。この100キロを歩く行為は、そう簡単に誰もかれもが完歩することではない。にもかかわらず、かなり多くの参加者が完歩している。そこで本研究は、この100キロハイクに参加し、完歩する者の100キロハイクのイメージやまた完歩するための条件などを明確にすること。そしてさらに、この100キロハイクが参加者に対して、どのような影響を与えるのか、また、冒険教育のプログラムとしての可能性があるかを明らかにするための基礎研究とすることを目的とする。

2. 100キロハイクについて

100キロハイクは東京近郊周回コースを3～5名のグループで24時間を目安に完歩することを目的としている。毎年、事前に一回のオリエンテーションを行っている。午前9時頃スタートし、ゴールは翌朝から午後2時頃までに全員が到着している。参加者は途中、いくつかのチェックポイントで通過確認や、健康チェックを受け、食事や休憩も各グループごとに適宜取り、ゴールを目指し歩く。

毎年100名位の参加があり、3年間の平均完歩率が87.2%とかなり高い。所要時間は、一番早い者で16時間30分（平均時速毎時6.07Km）、遅い者で29時間55分（平均時速毎時3.35Km）である。

3. 研究方法

本研究は、1987年より1989年までの毎年11月に行われた100キロハイクに参加した者（主に大学生）341名を対象に、直前、直後に各々質問紙調査を行った。

- ① 1987年11月22日～23日 136名有効回収数 107（78.7%）
- ② 1988年11月26日～27日 116名有効回収数 98（84.5%）
- ③ 1989年11月25日～26日 99名有効回収数 96（88.3%）

4. 結果と考察

100キロハイクに対する事前のイメージでは、とにかく素晴らしいことなのだという肯定的な考え方や協力ややる気といった積極的な姿勢が多いに見受けられる。同時に、100キロハイクは長く難しいことであるという認識も、強く持っている。この認識は100キロを完歩した後も、事前のイメージ通りであったようで、強く残っている。

事前のイメージと事後のイメージの差で見ると、実際の感覚として体を襲った痛みが大きく伸びる。これは実体験として感じたことであり、①100キロハイクがいかにか身体的苦痛を伴うものであるかがわかる。また、事後のイメージと事前、事後の差位による項目の変化を見ると、事後のイメージの中で、長く難しいものであるという認識はあるものの心の動きとしては、協力や思いやりを感じ、嬉しいという感動を体験している。すなわち、②100キロハイクの中の心のムーブメントは、確かに長く難しいものであるが、それをも上回る協力や、思いやりといった人的交流によって感動を得ていくプログラムであることがわかる。

さて、100キロハイクを完歩するのに影響を及ぼすしたものを聞いてみると、驚くことに体力的なことよりも、意地や気力といった精神力の充実が必要であることがわかる。他にもグループで行動するため、仲間との協力やペース配分等も大きな要因となっている。同時に、その100キロハイクを運営するスタッフの力も大きな影響を及ぼしている。実際に100キロ完歩するのに必要なことと思われる体力、天候、休息の取り方、自分のペース等の具体的なものに関しては、それほど大きな影響を与えていないことがわかる。つまり、ここでは体力的なことより、各個人の精神力の充実こそが完歩するための絶対条件であることが判明した。

そこで、参加者に事前に、自分でどれくらい歩けるかと思うかという問いには、3年間の平均で84.4%の人が完歩出来るという自信ある答えをしている。更になぜ歩けるかと思うかという問いでは、3年間の平均で、実に、35.2%の人が精神的に自信があると答え、23.3%の人が精神的に体力的にもその両方に自信があると答えている。体力的に自信があると答えた者は11.3%と意外と低いことがわかる。このことから100キロハイクの完歩は、マインドゲームと言われるように参加者の気の持ち方が重要になることがわかる。

実際に100キロハイクを終えてどんなことに気付いたか聞いてみた。身体的には体力があると思ったが、31.7%逆にないと答えた者が35.5%と、ほとんどが体力についての解答であった。精神面については、強いが26.6%逆に弱い12.2%そして気力が大切が10.9%となった。その他のことについては、他人のことを意識した10.6%自己発見が3.8%などがあつた。

5. まとめ

今回の研究により、完歩するも者の多くが事前の100キロハイクのイメージは肯定的なイメージを持っている。しかし実際やってみると身体的な苦痛を一番感じている。すばらしい、嬉しい、協力的、思いやりのある等の精神的充実感も十分に感じていることがわかった。また100キロハイクを完歩するには、一見体力の強さが要求されるようだが、実は精神的な強さが一番要求されることであり、更に仲間との協力も重要であることがわかった。現在のやり方で行う100キロハイクは、スポーツ的な個人競技としてではなくグループ活動における困難体験として、若者に何らかのインパクトを与えることがわかった。その意味においては冒険教育プログラムとして十分効果があると考えていいだろう。しかし今後は100キロハイクが冒険教育的プログラムとして、どのような効果があるのかを更に明確にする必要があるだろう。

ホノルルマラソン完走者の満足要因の分析

-日本人完走者を対象として-

○ 松本 耕二 (鹿屋体育大学大学院) 野川 春夫 (鹿屋体育大学)

スポーツイベント ホノルルマラソン 完走者 満足要因

I. はじめに

近年、日本人の海外旅行者が増加し、また健康ブームの影響を受けて市民マラソン大会やトライアスロンといった海外へのスポーツイベントへの参加が増大している。その中で今日、数多くの外国人参加者を集め、国際的なスポーツイベントとして成功した市民マラソンの一つとして、ホノルルマラソンが挙げられよう。ホノルルマラソンではここ数年日本人参加者の増加が顕著であり、1987年の第15回大会以降では“外国人”である日本人が、全参加者の過半数を占めるようになった。

ホノルルマラソンについては、完走者のプロフィールに関する研究が山田らによってなされているが、参加者が大会のどのような側面に満足しているかは明らかにされていない。スポーツイベントの運営を活性化するためには、参加者の満足要因を明らかにすることが重要となってくる。

従って、本研究では、ホノルルマラソンの日本人完走者に対して、大会に対する満足要因を明かにし、今後の大会運営に対する基礎資料を得ることが目的であった。

II. 研究方法

調査対象 : 1988年「第16回ホノルルマラソン」および1989年「第17回ホノルルマラソン」における日本人完走者

調査時期 : 第1回調査 1988年12月11日 第2回調査 1989年12月10・11日

調査方法 : 質問紙法

第1回調査: 現地の調査員に依頼して、ゴール付近のカピオラニ公園内で、日本人フルマラソン完走者を有意に抽出し調査用紙を配布してその場で回答してもらい回収した。

第2回調査: 第1回目と同様にの方法で、大会当日と翌日の記録発表式の時に調査用紙を配布し、その場で回答してもらい回収した。

サンプル数: 第1回調査 195名 第2回調査 101名

III. 結果

1. サンプルの概要

今回のサンプルは、男性(1988年 77.9%、1989年 73.1%)、女性(1988年 22.1%、1989年 26.9%)であり、男性と女性の比率は1988年、1989年ともおよそ3対1の割合で男性の方が多かった。年齢は、1988年は、20代が最も多く(38.5%)ついで30代、40代、50歳以上そして10代の順であった。1989年では、20代(40.6%)が1988年と同様に最も多く、ついで10代、30代、40代、50歳以上の順であった。また職業別にみると、会社員(1988年 49.0%、1989年 37.0%)が最も多く、ついで学生(1988年 19.8%、1989年 34.0%)で、1988年、1989年とも全体の3分の2以上を占めていた。

ホノルルマラソン参加回数は、初参加者(1988年 86.6%、1989年 85.9%)が8割以上を占め、2回目(1988年 7.7%、1989年 9.1%)、3回以上(1988年 5.5%、1989年 5.0%)とする者は非常に少なかった。また、過半数の参加者(1988年 56.2%、1989年 61.6%)がフルマラソンの初体験者であった。

2. 完走者の大会に対する満足度

ホノルルマラソンの大会に対する満足度は、1988年、1989年とも全体的に非常に高いことがわかった。「運営全体」においては、「非常に満足」の回答が71.2%（1988）、72.3%（1989）、「満足」は、22.5%（1988）、25.7%（1989）と全体の9割以上が大会運営に満足であった。また「レース日程」「参加費」「マラソンコース」「ボランティアの対応」「参加賞」の5要因においても、「非常に満足」「満足」の回答が1988年、1989年とも8割を越え、中でも「ボランティアの対応」については「非常に満足」の回答が、88.0%（1988）、86.1%（1989）と最も高い値を示した。

一方、全体的に満足度が高い中で、「前夜祭（1988）」と「簡易トイレの数と場所（1988）（1989）」の満足度は約6割であり、他の要因に比べこの2項目においては余り高くなかった。また本調査では、完走者のホノルルマラソン参加回数およびフルマラソン経験と大会に対する満足度との間には、「前夜祭（1988）」（ $p < .05$ ）の他に有意な差は認められなかった。

IV. 要約

- (1) 完走者のホノルルマラソン全体に対する満足度は、1988年、1989年ともに非常に高い傾向を示した。
- (2) 「レース日程」「参加費」「マラソンコース」「ボランティアの対応」「参加賞」「運営全体」の6つの要因は、1988年、1989年とも満足度が高く、特に「ボランティアの対応」には、両年とも「非常に満足」の割合が高い傾向がみられた。
- (3) 「前夜祭」「簡易トイレの数と場所」は他の要因に比べ満足度が低く、特に「簡易トイレの数と場所」は1988年、1989年とも満足度の低い傾向がみられた。
- (4) 大会に対する満足度とホノルルマラソン参加回数およびフルマラソン経験との関連はほとんど認められなかった。

表1. サンプルの属性

| | | 1988年 | 1989年 |
|--------------|-------|----------------|---------------|
| 性別 | 男性 | 77.9 % (n=152) | 73.1 % (n=68) |
| | 女性 | 22.1 % (n=43) | 26.9 % (n=25) |
| 年齢 | 10代 | 4.6 % (n=9) | 34.7 % (n=35) |
| | 20代 | 38.5 % (n=75) | 40.6 % (n=41) |
| | 30代 | 22.1 % (n=43) | 10.9 % (n=11) |
| | 40代 | 19.5 % (n=38) | 6.9 % (n=7) |
| | 50歳以上 | 15.4 % (n=30) | 6.9 % (n=7) |
| 職業 | 会社員 | 49.0 % (n=94) | 37.0 % (n=37) |
| | 学生 | 19.8 % (n=38) | 34.0 % (n=34) |
| | 公務員 | 11.5 % (n=22) | 7.0 % (n=7) |
| | 自営業 | 6.8 % (n=13) | 3.0 % (n=3) |
| | その他 | 12.9 % (n=25) | 19.0 % (n=19) |
| ホノルルマラソン参加回数 | | | |
| | 初参加 | 86.6 % (n=168) | 85.9 % (n=85) |
| | 2回目 | 7.7 % (n=15) | 9.1 % (n=9) |
| | 3回以上 | 5.5 % (n=11) | 5.0 % (n=5) |
| フルマラソン経験 | | | |
| | 1回目 | 56.2 % (n=109) | 61.6 % (n=61) |
| | 2回目 | 12.9 % (n=25) | 11.1 % (n=11) |
| | 3回目 | 10.3 % (n=20) | 7.1 % (n=7) |
| | 4回以上 | 20.3 % (n=40) | 20.0 % (n=20) |

表2. サンプルの大会に対する満足度

| | 非常に満足 | | 非常に不満足 | |
|------------|--------|--------|--------|--------|
| | 満足 | 満足 | 不満足 | 不満足 |
| レース日程 | 60.2 % | 26.2 % | 10.5 % | 3.1 % |
| | 78.8 % | 15.2 % | 5.1 % | 1.0 % |
| 参加費 | 54.2 % | 34.2 % | 10.0 % | 1.6 % |
| | 53.5 % | 33.7 % | 12.9 % | 0.0 % |
| 前夜祭 | 24.1 % | 31.6 % | 32.8 % | 11.5 % |
| | 35.1 % | 45.7 % | 18.1 % | 1.1 % |
| マラソンコース | 69.6 % | 24.6 % | 2.6 % | 3.1 % |
| | 69.3 % | 21.8 % | 8.9 % | 0.0 % |
| 簡易トイレの数と場所 | 27.2 % | 33.0 % | 31.9 % | 7.9 % |
| | 30.7 % | 24.8 % | 28.7 % | 15.8 % |
| ボランティアの対応 | 88.0 % | 7.3 % | 2.1 % | 2.6 % |
| | 86.1 % | 10.9 % | 3.0 % | 0.0 % |
| 参加賞 | 45.5 % | 43.3 % | 9.6 % | 1.6 % |
| | 69.3 % | 26.7 % | 3.0 % | 1.0 % |
| 運営全体 | 71.2 % | 22.5 % | 4.2 % | 2.1 % |
| | 72.3 % | 25.7 % | 2.0 % | 0.0 % |

注) 上段 1988年 下段 1989年

地域におけるスポーツイベントの研究 (1)

- 菜の花マラソン完走者の満足要因の分析 -

○野川春夫 菊池秀夫 (鹿屋体育大学) 山口泰雄 (神戸大学) 長々原誠 (鹿屋体育大学)

地域活性化 スポーツイベント 完走者 大会運営 満足度

1. 緒言

数多くのスポーツイベントが、地域の活性化や企業のイメージの変革、まちづくり、村起こしあるいは健康増進などの目的で、日本の全国各地で日常茶飯事のように行われている。地域活性化と市民の健康増進を目的とするスポーツイベントの中において、市民マラソン大会は最も普及した身近なスポーツイベントといえよう。

市民マラソンに関する研究は、中高年齢者のランニングの意識の変化 (林ら: 1983)、ランナーの月間走行距離とパフォーマンスの関連 (有吉ら: 1984)、大会参加者が恒常的に参加する要因の弁別 (山下ら: 1984)、海外スポーツイベントに参加した日本人ランナーの参加意識と属性をアメリカ人ランナーとの比較研究 (山田ら: 1988) などがある。しかしながら、年々スポーツイベントが盛んになる中で参加者がイベントのどの側面にどの程度満足しているのかを明らかにした実証的な研究はほとんど行われていない。

従って本研究の目的は、鹿児島県内において地域活性化に成功している代表的な“指宿菜の花マラソン”を対象にして、マラソン完走者の大会における満足要因を明らかにすることによって、今後の大会運営に有益な基礎資料を得ることであった。

2. 研究方法

- 1) サンプル: “指宿菜の花マラソン”フルマラソンの部の完走者509名
- 2) 調査場所: 鹿児島県指宿市総合運動公園
- 3) 調査期日: 1989年1月8日(日)9:00~15:00(第1回)及び
1990年1月14日(日)9:00~15:00(第2回)の2回
- 4) 調査方法: フルマラソンの完走者509名(第1回: 300名、第2回: 209名)を菜の花マラソンのゴール地点において有意に抽出し、質問票を持った15名の調査員が完走者に約15分間の直接面接を実施した(有効回収率100%)。
- 5) 調査内容: サンプルの個人的属性、運動習慣、成績に対する満足度、参加のきっかけ、大会の運営に対する満足度、及び本大会への再参加の希望。なお、大会の運営に対する満足度、及び本大会への再参加の希望に関する項目の測定はLikert-scale typeの4段階評定を採用した。
- 6) 分析方法: 収集したデータは項目別に単純集計を行い、主な項目を年度別、参加回数別、及び居住地別(鹿児島県内vs鹿児島県外)にクロス集計を行った。

3. 結果の概要

本調査では、自己の成績に対して「非常に満足」と答えたサンプルは少なかったが、過半数以上のサンプル(1989年:60%, 1990年:72%)が自分の成績に満足していた。成績に対する満足度は参加回数が増すにつれて低くなる傾向がみられた。また、鹿児島県内からの

参加者は鹿児島県外の参加者に比べて成績に対する不満感が高かった。

葉の花マラソンの大会運営に対する総体的な満足度は、1989年・1990年のサンプルとも高かった。しかし、大会運営を6つの側面から検討したところ本サンプルの90%以上が「ボランティアの対応」満足しており、スポーツイベントに占めるボランティアの重要性が窺える(図1)。また、「参加賞」「大会のスケジュール(スタート時間等)」にもサンプルの参加回数や居住地に関係なく満足度が高かった。

これに対してサンプルは「トイレの設置場所と数」及び「マラソンコース」に不満を持っており、特に1990年の「トイレの設置場所と数」に対する不満感は1989年とは逆にサンプルの過半数を占め、マラソンの参加回数の多少にかかわらず不評であった。さらに、ランナーの成績に直接関係する「マラソンコース」については、参加回数が多いサンプルほど不満感が強い傾向がみられた。

4. 要 約

- 1) 「ボランティアの対応」が参加者に高い満足感を与え、スポーツイベントに重要な位置を占めていることから、今後もボランティアの質と量の維持・向上が必要となる。
- 2) 「トイレの設置場所と数」に対する不満が最も高いことから、参加者に分かりやすい場所にトイレを設置したり、参加者数とトイレの数の比率を見直し、参加者数にあった簡易トイレを用意する必要がある。
- 3) 「マラソンコース」は、ランニングタイムに直接影響を及ぼすことから、現状のコースの起伏や複雑さなどを再検討し、参加者が走りやすいコースを設定する必要がある。

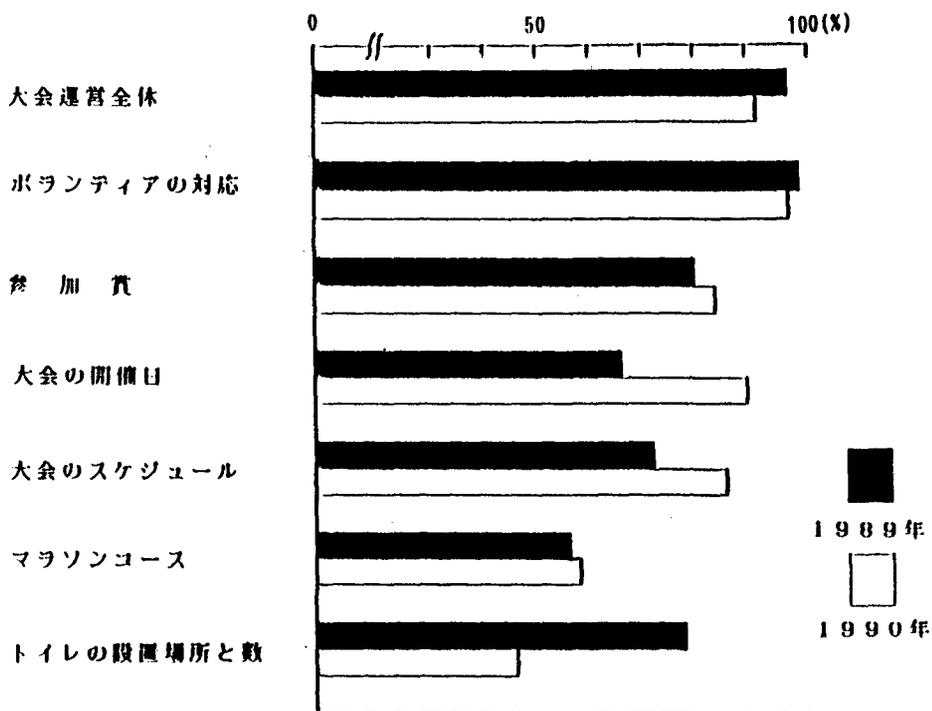


図1. サンプルの満足度(年度別)

地域におけるスポーツイベントの研究 (2)

— ボランティアの継続意欲を規定する要因の分析 —

○ 長ヶ原 誠 (鹿屋体育大学) 山口 泰雄 (神戸大学)
野川 春夫 (鹿屋体育大学) 菊池 秀夫 (鹿屋体育大学)

スポーツイベント 地域活性化 ボランティア 継続意欲

1. 緒言

現在、地域活性化を目的とした各種イベントが全国各地において盛んに開催されている。(財)地域活性化センターが行った調査(1989)によると、平成元年の10月から翌年の3月にかけて開催予定であった全国の地域イベント総数は5,243件に上り、対前年同期比で見ると29.8%の増加率であることが報告されている。しかしながら、地域イベントはこのような増加傾向を示している一方で、内容的には一過性、画一性、他力依存性、あるいはハード先行性などに代表される問題点が指摘されるようになってきた。

本来、地域活性化には、明確な長期的ビジョンを掲げた地域づくりに示される恒常的性質と、地域住民の協力体制や積極的な地域活動に見られる内発的性質が望まれる。このような意味から地域活性化を目的とした地域イベントにおいても、開催の定着に加えて地域住民による継続的かつ直接的参加が不可欠となり、特に大会運営に強い影響を及ぼすボランティア活動とその活動継続性が重要な意味を持つものと考えられる。

わが国のスポーツ・レジャーに関する研究領域について見てみると、地域イベントの運営に携わるボランティアを対象とした研究は最近になってようやく行われるようになってきた。この中でもボランティアの活動満足と継続意欲との関連を、初参加者と活動継続者において比較分析を行った綿ら(1989)による研究報告や、ボランティア活動の継続意欲を説明する因果関係モデルを設定し、パス解析によりモデルの妥当性を実証した山口ら(1989)の研究成果は、内発的あるいは恒常的な地域イベントを支えるボランティアの継続性を考える上で重要な示唆を与えてくれる。

本研究では以上のような社会的背景と研究知見を踏まえ、地域のスポーツイベントにおけるボランティア活動の継続意欲を規定する要因を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の方法

①調査方法

1990年度に開催された「指宿・菜の花マラソン大会」の運営に携わるボランティアを対象として、インタビュー法による質問紙調査を実施した。調査期日は同年の1月14日であり、回収した結果、サンプル数は男性が64(34.4%)、女性が122(65.6%)、計186となった。

②分析方法

ボランティア活動の継続意欲を規定している要因を明らかにするために、はじめに継続意欲を従属変数として、計23個の独立変数に対しピアソンの相関分析を行った。この結果、5%レベルで有意性が認められた変数だけを抽出し、このうち内部相関の高い変数は合成を行いながら最終的に7つの独立変数を設定した(Table-1参照)。さらに、抽出された7つの独立変数に対し、継続意欲を従属変数として重回帰分析(simultaneous model)を行い、重相関係数、決定係数、標準偏回帰係数を算出し、ボランティア活動の継続意欲に対する変数の規定力を分析・検討した。

3. 結果および考察

Table-2 は、重回帰分析により標準偏回帰係数の高かった独立変数を順に列挙したものである。分析の結果、個人的ボランティア動機は社会的ボランティア動機よりも継続意欲に対して強い規定力を示した。つまり、選手や大会運営、地域活性化への貢献などの社会的関心によるボランティア動機よりも、ボランティア活動やスポーツへの興味などの個人的関心によるボランティア動機が強い者ほど、継続意欲も高くなる傾向が見られた。これは、達成動機よりもボランティア動機が継続意欲に対して直接的に強い規定力を持っているとした、山口ら（1989）の研究結果と同様の傾向を示すものである。また対象者の特性として、年齢が高く、ボランティア経験がある者ほど継続意欲が高いという傾向が明らかとなったが、これはその一方で、若年層や初参加者の継続意欲がかなり低いという今後考慮すべき重要な問題性を示唆するものでもある。また、運動・スポーツ実施頻度が高い者は、ボランティア継続意欲も高い傾向を示しており、これは前述した通り、個人的ボランティア動機においてスポーツへの興味が強い者の継続意欲が高いといった本研究の結果を裏付けるものであろう。概して、今後のスポーツイベントにおけるボランティアの継続性を高めるには、特に若年層や初参加者に対して、ボランティア活動が自己にいかなる意味と価値をもたらすのかという個人的動機を高めることに注目する必要があると思われる。

Table-1 独立変数の説明

| 独立変数 | 操作定義 |
|-------------|--|
| 年齢 | 対象者の年齢 |
| 運動・スポーツ実施頻度 | 日頃の運動やスポーツ活動の実施頻度（4段階尺度） |
| ボランティア経験 | 本大会におけるボランティア参加回数 (ダミー変数：1. リピーター 0. 初参加者) |
| 個人的ボランティア動機 | ボランティア活動やスポーツへの興味などの個人的関心によるボランティア動機 (4段階尺度：2項目による合成変数) ¹⁾ |
| 社会的ボランティア動機 | 選手、大会運営、地域活性化への貢献などの社会的関心によるボランティア動機 (4段階尺度：3項目による合成変数) ¹⁾ |
| 個人的活動満足 | 役割の達成感や非日常性の獲得などのボランティア活動による個人的満足度 (4段階尺度：2項目による合成変数) ¹⁾ |
| 対人的活動満足 | 選手に対する貢献や他のボランティアとの交流などのボランティア活動による対人的な活動満足度 (4段階尺度：2項目による合成変数) ¹⁾ |

¹⁾ 各項目の合計得点による総和尺度を適用した。

Table-2 ボランティア活動の継続意欲を規定する要因

| 独立変数 | 標準偏回帰係数 | 単相関係数 |
|-------------|---------|----------|
| 個人的ボランティア動機 | . 198 * | . 332 ** |
| 年齢 | . 171 * | . 277 ** |
| 運動・スポーツ実施頻度 | . 166 * | . 198 ** |
| ボランティア経験 | . 156 * | . 253 ** |
| 対人的活動満足 | . 145 | . 297 ** |
| 社会的ボランティア動機 | . 054 | . 286 ** |
| 個人的活動満足 | . 019 | . 229 ** |
| 重相関係数 | . 498 | |
| 決定係数 | . 248 | |
| N | 186 | |

* P<. 05 ** P<. 01

地域におけるスポーツイベントの研究(3)

— 地域ビジネスとの関連から —

○菊池秀夫(鹿屋体育大学)

野川春夫(鹿屋体育大学) 山口泰雄(神戸大学) 長ヶ原誠(鹿屋体育大学)

スポーツイベント 地域活性化 地域ビジネス 経営者 マネジメント

1. 緒言

“イベントの時代”という言葉も聞かれるが、まさに日本列島はイベントラッシュである。これらのイベントは、国際的なものからローカルなものに至るまで内容・規模とも実に様々であるが、その数は過去5年間で約2倍になったとも言われている。このような状況の中で、地域で行われるスポーツイベントも益々盛んになりつつある。

こうした今日のスポーツイベントの隆盛は、折りからの健康やスポーツに対する人々の意識の高まりによるところもあるが、それ以上に一般のイベント同様、イベント自体がもたらすところの地域への影響・効果そしてその期待によるところが大きいといわれる。しかしながら、地域で開催されるスポーツイベントに関して、実際に地域にどの様な影響・効果もたらされているかについての実証的な報告は未だに少ないのが現状である。したがって、その実態はよく知られていない。イベントを真に地域の発展や福祉のため役立てていこうとするマネジメントの立場に立つならば、イベント開催の実態の更なる理解の必要性は言うに待たない。その意味で、実証的データの一層の蓄積は不可欠と言えよう。そこで本研究では、地域スポーツイベントのひとつとして鹿児島県指宿市で開催されている“指宿菜の花マラソン大会”を事例とし、本大会と地域との結びつきについて、その実態を明らかにしようとするものである。

特に、本研究の目的は、1990年指宿菜の花マラソン大会(以下‘大会’と略す)について、その地域ビジネスへの影響・効果をビジネス経営者サイドから把握すると共に、経営者サイドの大会への期待、関心度を明らかにすることにより、スポーツイベントと地域ビジネスとの結びつきについて実証的に記述することである。

2. 研究方法

調査対象：鹿児島県指宿市における地域ビジネス経営者(飲食店・物産店・宿泊業)。

指宿地区の最新の電話帳及び市街地住宅・店舗地図をもとに220店舗をリストアップ、これらの店舗の経営者220名を対象とした。

調査期間：1990年1月16日～26日(1月14日が大会当日)。

調査方法：郵送による質問紙調査。有効回収標本数は118、有効回収率は53.6%であった。

調査内容：大会時の売上げの変化(普段の週末と前年度比較)、大会への関心度、大会運営に関する要望、継続願望等。

分析方法：単純集計による記述統計およびクロス分析によった。

3. 主な結果と考察

有効回収標本118の内訳は飲食店67、物産店13、宿泊業38で、それぞれ56.4%、11.1%、

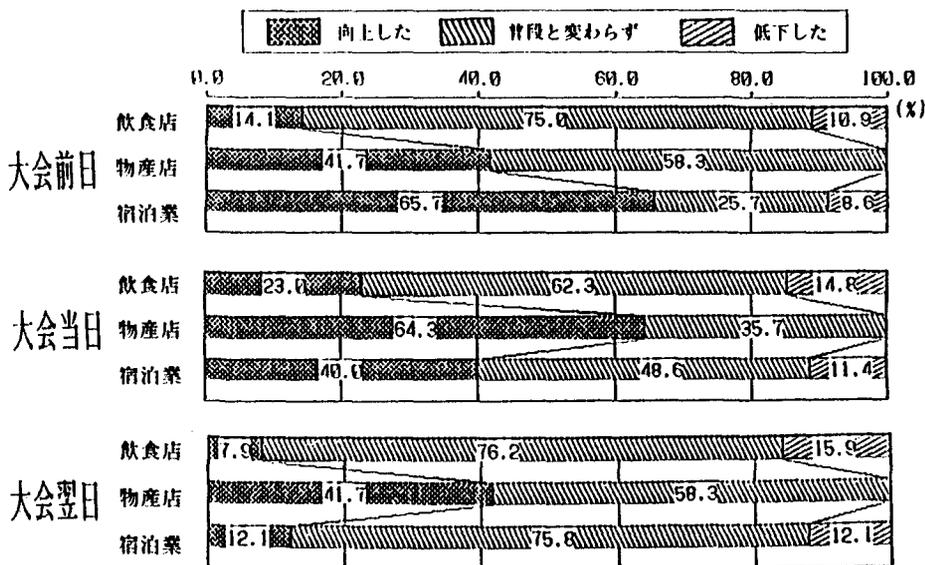
32.5%を占めていた。データの分析は、基本的にこの3つの業種別に行っている。

売上げについて：大会の開催された週末（大会前日、当日、翌日の3日間）と普段の週末の売上げとの比較では、物産店、宿泊業で売上げ向上がみられたが、飲食店では3日間を通じてほとんど普段と変わらなかった（図1参照）。特に宿泊業での大会当日の売上げ向上や物産店での3日間にわたる向上は、大会翌日が休日であった故に参加者等の中には滞在を1日のばす人も少なくなかった為と考えられる。また前年大会との比較では、宿泊業、物産店で売上げ向上がみられたところが多く、両者とも約40%が向上したと報告している。これも大会翌日が休日であったことによるところが大きいと推測される。飲食店に関しては、前年比でもそれ程の向上はみられていない。いずれにせよ、売上げに関しては、主に宿泊業と物産店が大会からの直接的な恩恵を得ていると理解することができよう。

大会への関心度について：経営者サイドの大会への関心度を、客数の増加、売上げの向上、指宿のイメージアップ、指宿の知名度の向上という4点から探ってみた。まず客数の増加に関しては物産店、宿泊業でそれぞれ83%、91%が関心ありと回答し、同様な関心を約半数（50.8%）のものしか示していない飲食店を大きく上回る結果となった。売上げの向上についての関心も、ほとんど同様の結果が得られている。これらの結果は、先にみた実際の売上げに関する経営者の評価と大きく関連しているといえよう。次に指宿のイメージアップ、知名度の向上についてみると、いずれの業種も90%以上（物産店においては100%）が肯定的な関心を示し、飲食店、物産店、宿泊業の業種を問わず高い関心を持っていることが明らかになった。集客や売上げの面で大会の直接的な恩恵を被ることの少ない飲食店経営者も、指宿のイメージアップや知名度の向上という地域の活性化につながる大会の影響・効果というものに関しては、かなりの期待を抱いているものと言えよう。

発表当日には、以上のような結果と配布資料を基に、より詳細な研究報告をする。

図1.大会による売上げの変化：普段の週末との比較 —前日・当日・翌日—



成人男性のライフステージから見た レジャー・ライフスタイル

○川西 正志、菊池 秀夫（鹿屋体育大学）
北村 尚浩（鹿屋体育大学大学院）、江橋 慎四郎（中京大学体育学部）

レジャー・ライフスタイル、ライフステージ、成人男性

1. 緒言

わが国では、今日の余暇時代と高齢化社会への突入に際して、人々の生涯にわたる学習やレジャーの推進とそのための条件整備が急務となっている。最近ではそうした動きは、すでに全国の地方公共団体の下で、生涯学習・レジャーの推進の為にソフト・ハード両面での開発が展開されつつある。昭和62年経済企画庁からは、生涯レジャー学習なる調査報告書が発行され、その中で生涯学習カリキュラムにおけるレジャー教育の必要性と体系的枠組みが紹介され、さらにレジャーへの態度や習慣を育成する為の学習プロセスが紹介されている。また、カナダのオンタリオ州からは、人々のレジャーに対する意識、価値、態度、習慣等を核としたレジャー・ライフスタイル（以下「LLS」と略す）の育成の手引き書を発行し、このことは生涯レジャー推進にはLLS育成の為の教育プログラムの充実が重要であることを示唆しているといえよう。

LLSなどのライフスタイルに関する概念やそれについての研究は、多くはマーケティングの分野で取り扱われてきた研究手法で、最近では、レジャーやスポーツの行動科学的な研究や社会学的研究の中でも応用されつつある。

2. 目的

本研究では、成人男性の年齢を中心とした各ライフステージ別のレジャー・ライフスタイル特性を明かにすることを目的とする。

3. 方法

1) 調査方法

本研究での調査対象は、東京都に本社を置く機械製造・販売とレジャーサービス業を営むM社の20歳以上の男性社員1183名で、所定の調査用紙を用いて1989年8月から9月にかけて、本社からの郵送法によって実施された。有効回収率は45.4%であった。

2) 分析方法

LLS項目の数量化については、「あてはまる」から「あてはまらない」の5段階測定順に、それぞれ5から1の得点を与えた間隔尺度として測定された。LLS項目の分析では構造を把握するために、因子分析を用いて因子の抽出を行った。因子の抽出にあたっては主因子法を、因子軸の回転にはバリマックス直交回転をそれぞれ用いた。次に、ライフステージによる比較は、まず中年前・後期（35歳を基準）について、次に20歳代から50歳代以上の4ステージ別に因子得点の平均値をも検定ならびにF検定を行った。

4. 結果及び考察

35項目のLLSを因子分析した結果、表1に示すような次の8因子が抽出され、各々「参加意欲」「情報の収集」「価値認知」「環境条件」「興味内容」「健康・体力志向」「参加抑制」「経済性」の因子と命名された。35歳を基準とした中年前・後期におけるライフステージでは、因子得点に有意な差が見られたのは、参加意欲、健康・体力志向、参加抑制、情報の収集の4因子であった。これは、中年前期においては、レジャーに対する参加意欲や情報収集が、逆に中年後期においては、健康・体力志向や仕事や家庭環境によるレジャーへの参加抑制に関する態度や意識が高くなる傾向を示しているようである。

表. 1 レジャー・ライフスタイルの因子分析結果

| レジャーライフスタイル項目(変数) | 寄与率(累積寄与率) | バリマックス回転後の因子負荷量 | | | | | | | | Cronbach's α値 |
|---------------------------------|-------------|-----------------|------|------|------|------|------|------|----|------------------|
| | | F1 | F2 | F3 | F4 | F5 | F6 | F7 | F8 | |
| 【レジャーへの参加意欲】 | 21.7 (21.7) | | | | | | | | | .86 |
| レジャー活動によって自分の行動範囲を広げたいと思っている | .83 | .10 | .13 | -.03 | .14 | .07 | -.04 | .06 | | |
| レジャー活動によって日常生活に変化を与えたいと思っている | .82 | .10 | .11 | -.02 | .11 | -.05 | -.15 | .10 | | |
| レジャー活動を日常生活の中に多く取り入れたいと思っている | .74 | .13 | .21 | .05 | .12 | .06 | -.10 | .00 | | |
| レジャー活動を自己開発に役立てたいと思っている | .70 | .02 | .22 | .02 | .32 | .07 | .01 | .06 | | |
| レジャー活動をこれからの人生に役立てたいと思っている | .68 | .06 | .23 | .07 | .21 | .12 | -.03 | .02 | | |
| 自由な時間が増えたらもっとレジャー活動を行いたいと考えている | .51 | .23 | .30 | -.00 | -.05 | .02 | -.25 | .10 | | |
| 【レジャー情報の収集】 | 11.6 (33.3) | | | | | | | | | .86 |
| レジャーに関する情報や資料を収集している | .12 | .81 | .07 | .10 | .13 | .06 | .11 | .01 | | |
| レジャーに関する情報を提供してくれる場所を知っている | .05 | .77 | .12 | .24 | .09 | .12 | .03 | -.05 | | |
| レジャーに関する本や雑誌をよく読んでいる | .20 | .76 | .01 | -.04 | .09 | .18 | .05 | -.06 | | |
| レジャーに関する情報を提供してくれる場所が身近にある | -.01 | .73 | .05 | .30 | .06 | .10 | .10 | -.01 | | |
| レジャーに関する情報に興味・関心がある | .34 | .55 | .14 | .05 | .22 | .19 | -.14 | .12 | | |
| 【レジャーの価値認知】 | 5.8 (39.2) | | | | | | | | | .83 |
| レジャー活動は身体の上昇に役立つと思っている | .16 | .05 | .79 | -.02 | .18 | .14 | -.06 | .13 | | |
| レジャー活動は精神面の上昇に役立つと思っている | .21 | .06 | .79 | -.03 | .17 | .06 | -.09 | .03 | | |
| レジャー活動は日常生活の中で重要なことだと考えている | .26 | .08 | .73 | -.03 | .01 | .03 | -.16 | .12 | | |
| レジャー活動は社会を発展させるものだと考えている | .27 | .08 | .68 | .17 | -.01 | .05 | -.04 | -.03 | | |
| 【レジャー環境条件】 | 5.3 (44.5) | | | | | | | | | .85 |
| レジャー活動の手助けとなるよい指導者が身近にいる | .01 | .23 | .01 | .85 | .04 | .10 | .03 | -.06 | | |
| レジャー活動の手助けとなるよいプログラムが身近にある | -.01 | .26 | .01 | .82 | .09 | .02 | .09 | -.13 | | |
| レジャー活動をするのにより施設が身近にある | .04 | .03 | .00 | .81 | .12 | .12 | -.02 | .01 | | |
| 【レジャー活動への興味内容】 | 4.8 (49.3) | | | | | | | | | .78 |
| 創作的な活動に興味がある | .19 | .15 | .06 | .08 | .74 | -.01 | -.01 | -.03 | | |
| 知識・技術が学べる活動に興味がある | .11 | .05 | .11 | .04 | .74 | .05 | -.01 | .10 | | |
| 社会や人のためになる活動に興味がある | .11 | .06 | .03 | .09 | .73 | .15 | .15 | -.03 | | |
| 仲間づくりに役立つ活動に興味がある | .38 | .16 | .05 | .01 | .58 | .09 | -.07 | .06 | | |
| 【レジャーへの健康・体力志向】 | 4.5 (53.8) | | | | | | | | | .77 |
| 健康の保持・増進に心がけている | .10 | .08 | .10 | .04 | .13 | .83 | .01 | .07 | | |
| 体力づくりに心がけている | .13 | .16 | .04 | .05 | .11 | .80 | .03 | .02 | | |
| 規則正しい生活をしていると思っている | -.07 | .08 | .03 | .06 | .05 | .66 | .01 | -.09 | | |
| 自分の年齢・体力にあったレジャー活動を行っている | .19 | .37 | .12 | .19 | -.10 | .56 | -.04 | .06 | | |
| 【レジャーへの参加抑制】 | 4.3 (58.1) | | | | | | | | | .60 |
| レジャー活動を行うことは自分の年齢・体力に適していない | -.14 | -.01 | -.14 | -.03 | -.01 | .08 | .74 | -.08 | | |
| 病気や障害を持っているので自分にレジャー活動は適さない | -.08 | .04 | -.13 | .04 | -.02 | .08 | .73 | -.04 | | |
| レジャー活動のための時間はムダだと思っている | -.23 | -.02 | -.27 | .17 | .10 | .01 | .55 | -.05 | | |
| 家庭での仕事が多くてレジャー活動にあまり取り組めない | -.02 | .11 | .11 | -.06 | .05 | -.18 | .54 | -.01 | | |
| 病気や障害があるとときでもできる範囲のレジャー活動を行っている | .22 | .24 | -.00 | .23 | -.08 | .19 | .36 | .10 | | |
| 【レジャー活動の経済性】 | 3.7 (61.8) | | | | | | | | | .58 |
| レジャー用品は高いと思っている | .12 | -.01 | .01 | -.06 | .05 | -.00 | -.09 | .78 | | |
| レジャー活動のために利用する施設の使用料は高いと思っている | .08 | .06 | -.05 | -.06 | -.00 | .08 | -.18 | .71 | | |
| レジャーにかかるお金はあまり気にならない | .07 | .26 | -.09 | -.06 | -.06 | -.03 | -.14 | .56 | | |
| レジャー活動を行うとき障害(お金、場所など)となることが多い | .09 | .11 | .24 | -.06 | -.02 | -.11 | .01 | .52 | | |

付記:本研究は、1989年度(財)日本レクリエーション協会レジャーレクリエーション研究所助成研究「成人男性のレジャー行動とバーチャル・リアリティに関する研究プロジェクト」の一部である。

成人男性の旅行型レジャー実施者の パッケージ・ライフスタイル

○北村 尚浩（鹿屋体育大学大学院）

川西 正志、菊池 秀夫（鹿屋体育大学）、江橋 慎四郎（中京大学体育学部）

パッケージ・ライフスタイル、旅行型レジャー、リゾート

1. 緒言

人々の余暇意識が高まる中で、旅行型レジャーの需要は増大している。加えて、昭和62年に施行された総合保養地整備法（通称リゾート法）をきっかけとし、旅行型レジャーの矛先となるべきリゾート開発がより一層進められてきている。しかし、そうしたリゾートブームの一方では、各開発地の環境破壊や地価の高騰といった社会問題を引き起こしているのも事実である。また、ユーザーレベルからはデベロッパ先行のリゾート地のソフト・ハード開発の画一化が指摘され、この意味からは、リゾートへの人々の多様なニーズに対応することが現状の大きな課題であることは言うまでもない。

従来、マーケティングの分野では、多様化が進む消費者への商品やサービスの予測や開発に有効な手法として、ライフスタイル分析による研究アプローチがよく行われてきている。Perreaultらは、休暇に関するライフスタイル（パッケージ・ライフスタイル：以下「VLS」と略す）の概念を用いて、アメリカ人の旅行型レジャー志向特性を説明している。わが国では人々の旅行型レジャーへの志向が高まる中、当然のことながらそうしたレジャー志向とリゾートへの期待や意識に関する分析も重要である。さらに、こうした人々のVLS特性を明らかにすることは、今後の旅行型レジャーへの多様なニーズを予測する上で、有効な手だてとなるであろう。

2. 目的

本研究は、成人男性の旅行型レジャー実施者のVLSを明らかにすることを目的としている。

3. 方法

1) 調査方法

本研究で対象とした調査サンプルは、東京都に本社を置き機械製造販売とレジャー・サービス業を営むM社の20歳以上の男性社員1183名を対象に、所定の調査用紙を用いて1989年8月から9月にかけて、本社からの郵送法によって実施された。有効回収率は45.4%（N=537）であった。

2) 分析方法

本研究で分析対象とする調査項目は、過去の旅行型レジャー経験とVLSに関する項目（41項目）である。データの分析には因子分析を用い、VLS因子を抽出した。因子の抽出には主因子法を、因子軸の回転にはバリマックス直交回転をそれぞれ用いた。また、旅行型レジャー経験の有無によるVLSパターンの相違を明らかにするため、対象者を経験群と非経験群とに分け、各VLS因子の因子得点を比較した。有意差の検定には、t検定を実施した。

4. 結果及び考察

41のVLSに関する項目について因子分析を施したところ8因子が抽出され、それぞれ「休暇条件への不満・願望」「計画性」「積極的・活動的休暇志向」「家族」「情報収集」「脱日常的な休暇願望」「価値意識」「経済的節約志向」と命名された。

特に、旅行型レジャー経験の有無によって「休暇条件への不満・願望」「計画性」「積極的・活動的休暇志向」「価値意識」の4因子で因子得点に有意な差がみられた。

表1. VLSの因子分析結果

| VLS項目(変数) | 寄与率(累積寄与率) | バリマックス回転後の因子負荷量 | | | | | | | | | | Cronbach's α値 |
|-----------------------------|--------------------|-----------------|------|------|------|------|------|------|------|--|--|------------------|
| | | F1 | F2 | F3 | F4 | F5 | F6 | F7 | F8 | | | |
| 【休暇条件への不満・願望】 | 14.0 (14.0) | | | | | | | | | | | .76 |
| もっと休暇をとりたい | | .66 | .03 | -.11 | .06 | .01 | -.03 | .16 | -.12 | | | |
| 海外旅行に行きたい | | .60 | .04 | .19 | -.00 | .24 | .03 | .10 | .06 | | | |
| 思うように休暇がとれるので現在の余暇時間に満足している | | -.58 | .08 | .32 | -.01 | .10 | .02 | .06 | .04 | | | |
| 日本のレジャー施設は使用料が高すぎる | | .56 | .01 | .07 | -.00 | -.09 | .14 | -.18 | .27 | | | |
| 短い休暇を何度も取るより長期休暇をとりたい | | .56 | .16 | -.03 | .17 | -.14 | .01 | .08 | .00 | | | |
| 休暇をとることは大切なことである | | .56 | -.01 | .09 | .06 | .05 | .15 | .06 | -.09 | | | |
| 見知らぬ土地に旅行してみたい | | .55 | .11 | .11 | -.02 | .14 | .23 | .39 | -.11 | | | |
| 旅行するのが好きである | | .52 | .13 | .29 | .10 | .26 | .17 | .32 | -.10 | | | |
| 休暇のために使えるお金が十分でない | | .46 | .01 | -.09 | -.03 | -.05 | .20 | -.28 | .30 | | | |
| 【計画性】 | 8.8 (22.7) | | | | | | | | | | | .79 |
| 休暇の過ごし方について友人によくアドバイスを求める | | .02 | .81 | .17 | .04 | .10 | -.08 | .09 | .05 | | | |
| 旅行について友人からよく相談を受ける | | .09 | .78 | .15 | -.03 | .11 | -.09 | .06 | .06 | | | |
| 休暇を何に使うか友人とよく相談する | | .08 | .67 | .05 | -.16 | .26 | -.03 | -.03 | -.05 | | | |
| グループで旅行する時は率先して計画を立てる | | .10 | .57 | .25 | .11 | .06 | -.09 | .17 | .06 | | | |
| 定期的に旅行・レジャー雑誌を読む | | -.08 | .48 | -.02 | .10 | .44 | -.10 | .26 | .11 | | | |
| 旅行前に必ずガイドブックを買う | | .09 | .34 | .01 | .24 | .28 | -.07 | .32 | -.09 | | | |
| 【積極的・活動的休暇志向】 | 6.3 (29.0) | | | | | | | | | | | .69 |
| 休暇をばんやりと過ごすことが多い | | -.07 | .06 | -.70 | -.01 | -.08 | .06 | .06 | .04 | | | |
| 充実した休暇を送っている | | -.19 | .20 | .69 | .08 | .05 | .06 | -.01 | .01 | | | |
| 休暇にはいろいろなことをして楽しんでいる | | .04 | .29 | .68 | .02 | .03 | .01 | .20 | -.01 | | | |
| 休暇は計画的に使う | | -.03 | .18 | .52 | .36 | .03 | -.01 | .17 | .00 | | | |
| 休暇は家でのもんびりと過ごしたい | | -.22 | -.04 | -.50 | .35 | -.08 | .31 | .08 | .05 | | | |
| 休暇にはスポーツをして過ごす | | .05 | .30 | .35 | .03 | -.08 | .08 | .00 | .22 | | | |
| 【家族】 | 5.2 (34.2) | | | | | | | | | | | .83 |
| 休暇は家族と過ごしたい | | .07 | -.02 | .03 | .87 | .05 | .10 | .00 | .05 | | | |
| 休暇は家族のためにとる | | .04 | .06 | -.01 | .82 | -.02 | .05 | .01 | .11 | | | |
| 家族で旅行するのが好きだ | | .17 | .05 | .18 | .72 | .17 | .03 | .02 | .05 | | | |
| 【情報収集】 | 4.2 (38.4) | | | | | | | | | | | .58 |
| 温泉がブームになったときには温泉へ出かけた | | -.11 | .28 | .06 | -.08 | .61 | .14 | -.13 | .02 | | | |
| 一ヶ所に滞在するよりもあちこち見て回る旅行が好きだ | | .11 | .00 | .11 | .02 | .60 | .04 | .07 | .05 | | | |
| テレビのレジャー番組をよくみる | | .08 | .13 | -.10 | .21 | .55 | -.10 | .19 | .07 | | | |
| 旅行雑誌で取り上げられた場所によく旅行する | | -.11 | .31 | -.01 | -.05 | .52 | -.07 | .04 | .11 | | | |
| パッケージツアーよりも一人旅の方が好きである | | .00 | .17 | -.17 | -.12 | -.44 | .23 | .36 | -.04 | | | |
| 旅行についての記事や話に興味がある | | .18 | .25 | .28 | .09 | .38 | .08 | .26 | -.03 | | | |
| 【脱日常的な休暇願望】 | 4.1 (42.4) | | | | | | | | | | | .63 |
| 旅行するならば都市よりも風景のよいところを選ぶ | | .23 | -.06 | .09 | -.04 | .07 | .72 | .15 | .02 | | | |
| 休暇には人里離れた自然の中で過ごしたい | | .16 | .03 | -.06 | .02 | -.01 | .63 | .29 | .00 | | | |
| 休暇中は大都市やその近郊で過ごしたい | | -.07 | .29 | -.05 | -.02 | .10 | -.60 | .03 | .11 | | | |
| 休暇はのもんびりとリラックスするためのものである | | .03 | -.04 | -.10 | .25 | -.01 | .54 | -.13 | -.01 | | | |
| 【価値意識】 | 3.5 (46.0) | | | | | | | | | | | .52 |
| 休暇を知識・教養を身につけるために使いたい | | .13 | .18 | .14 | -.06 | .08 | .06 | .62 | .15 | | | |
| 休暇は見知らぬ人と出会うよい機会である | | .09 | .06 | .02 | .08 | .03 | .10 | .59 | .14 | | | |
| 【経済的節約志向】 | 3.1 (49.1) | | | | | | | | | | | .57 |
| レジャーに対しての出費はできるだけ抑える | | -.12 | -.00 | -.16 | .00 | .00 | .09 | -.16 | .64 | | | |
| 旅行の際ムダ使いはしない | | -.15 | -.14 | .08 | .21 | -.03 | -.01 | .28 | .61 | | | |
| できるだけ安いパッケージツアーを探す | | .15 | .10 | .10 | .09 | .11 | -.14 | .00 | .58 | | | |
| たとえ季節外れでも費用が安い時期に旅行に行く | | .06 | .21 | .06 | .03 | .08 | .04 | .16 | .51 | | | |
| 移動に時間がかかっても安ければ飛行機よりも列車を使う | | -.05 | -.03 | -.07 | -.05 | .17 | -.20 | .28 | .47 | | | |

付記: 本研究は、1989年度(財)日本レクリエーション協会レジャー・レクリエーション研究所助成研究「成人男性のレジャー行動とパッケージ・ライフスタイルに関する研究プロジェクト」の一部である。

スポーツにおける若者(女子)の ライフスタイル

梅津 迪子 (女子聖学院短期大学)

スポーツ 若者 ライフスタイル

1. 研究目的

現代青年の特徴として、対人関係の未熟さ、稀薄さが指摘されている。エリクソンは、成人初期の発達課題の一つに「親密性」(intimacy)をあげている。この「親密性」は「他者」と「自己」に二分されるが、現在の若者は「自己」への個人的ナルシズムへ傾き、「他者」とのバランスに欠けている。このことは、自己のアイデンティティの確立と関連するが、概して、この確信が持てない青年は人間関係の「親密」な関わりを回避しがちであるといわれている。対人関係が土台のクラブ活動においても、所属率が減少の傾向にあり、その存在理由やあり方に変化がみられる。クラブ活動は、参加したい者が自由に、自覚した要求にもとづく有志の集団活動であるが、現在はクラブ活動への所属もファッション化、「群れ」志向になっている。(そこに行くだけで満足感を得る) スポーツ種目も、チームスポーツより個人種目が多く、四季に応じたオールラウンドの同好会型で学外交流が盛んである。活動への参加は、スポーツ・体育の好嫌度に関連しており、その好き嫌いは、両親のスポーツ活動への興味や理解の有無、幼小期における自然空間での遊びの量、従来の体育授業内におけるマイナス体験等が複合し影響していると思われる。

そこで、過去のクラブ活動所属者を中心に、スポーツにおける女子のライフスタイルの実態を把握し、問題点を整理するとともに今後のレジャー・レクリエーションにおけるスポーツのあり方を検討するための資料としたい。

2. 研究方法

関東・東北地方の短大・大学の各2年生女子1544名を対象にアンケート調査を実施。調査時期は1990年4月～5月。統計処理は福島大学行政社会学部統計処理センター。

3. 結果と考察

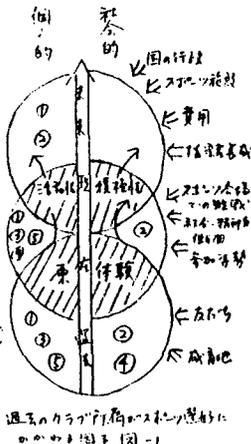
(1) クラブ活動の現状

ここでは、中学・高校時代の6年間クラブ活動所属者(中イ～高イ)を所属型、対して無所属(中ハ～高ハ)を未所属型とし、二つの型を軸に有意差がみられた項目について述べる。

過去のクラブ活動所属 表-1

| 所属のタイプ | % |
|-------------|------|
| 中イ - 高イ | 30.0 |
| 中中イ - 高中イ | 11.0 |
| 中中中イ - 高中中イ | 19.9 |
| 中中中ロ - 高中中ロ | 2.4 |
| 中中中ハ - 高中中ハ | 2.9 |
| 中中ハ - 高中ハ | 8.3 |
| 中ハ - 高ハ | 3.1 |
| 中ハ - 高ハ | 2.6 |
| 中ハ - 高ハ | 17.5 |
| 不明 | 2.3 |

中イ…中学時代3年間所属
中中イ…一時期所属しなかった
中中中イ…全高時代3年間所属
中中中ロ…一高時代所属
中中ハ…一高時代所属しなかった
中ハ…全く所属しなかった



有意差のみられた因子 表-2

| | 項目 | 有意水準 |
|----|-----------------------|-------|
| 未来 | ①結婚後のスポーツへの積極的にかかわり | ※※※※ |
| | ②子供のスポーツ活動奨励 | ※※※※ |
| 現在 | ①現クラブの所属の有無 | ※※※※※ |
| | ②スポーツ仲間の有無 | ※※※※※ |
| | ③運動不足、体力の自信の有無 | ※※※※※ |
| | ④⑤運動快不快 | ※※※※※ |
| | ⑤スポーツ観への関心の有無 | ※※※※※ |
| 過去 | ①両親の市街スポーツ活への理解 | ※※※※※ |
| | ②自然小中高校に於ける遊の体好業の好き嫌い | ※※※※※ |
| | ③小さい中高校に於ける遊の体好業の好き嫌い | ※※※※※ |
| | ④⑤授業に於ける遊の体好業の好き嫌い | ※※※※※ |
| | ⑤授業に於ける遊の体好業の好き嫌い | ※※※※※ |

※※※ 0.001> ※※ 0.01>

表1に示す通り、所属型は30%、未所属型は17.5%であった。現在のクラブ活動への所属率は所属型が69.4%であり、タイプ別では運動部34.1%、同好会31%、不明30%と三分されるが、活動への参加姿勢は56.4%が積極的である。未所属型は、所属型の半分以下(30.6%)で運動部4.4%、同好会22.8%、69.4%は不明である。参加姿勢は「非常に積極的」が4.4%である。ここでも69.4%が不明であるのは、名目的所属によるのか、好きな時だけ参加するため、タイプ別や参加姿勢の判断に苦慮している姿が伺える。所属型においても、同好会や不明者を合わせると60%以上になり、現在のクラブ活動が名目的であったり、組織に束縛されない自由性を持ち、活動の目的、存在のあり型が変容してきている。

(2)過去のクラブ活動所属の有無にかかわる要因

所属型と未所属型を軸として有意差がみられた項目を過去・現在・未来の角度から、個人的要因、社会的要因に分類し、構造化したのが図1、表2である。

過去における要因は所属型の幼小期における遊びが「自然」23%、「市街地」72%に比べ、未所属型は5~7ポイント低く、逆に「家の中」での遊びが11.3ポイント高い。両親のスポーツ活動に対する興味や理解の程度は所属型が未所属型に比べ6~8ポイント高く、父より母に多くみられる。そして過去の体育授業内での嫌な体験は所属型でも半分以上あり、未所属型は79.3%もある。内訳はいずれの型も「うまくなれない」「おもしろくない」といった自己の技能に関するものが多い。スポーツの好き嫌いは上記の要因を背景に「できる、できない」が他人にも分かることや、「うまくできない」ことが好き嫌いとなり、「無理矢理やらされた」と感じるのであろう。できるようになった時のたのしさを体感することや、幼小期における色々な原体験の量がクラブ活動所属に影響し、現在の活動への積極性や行動力に移行していくことになるであろう。

(3)スポーツにおけるライフスタイル

スポーツの「好き嫌い」は所属型と未所属型で29ポイントの差があり、「非常に好き」な者との差は30.5ポイント所属型が高い。「スポーツ仲間」は、所属型の65.7%が「多い」のに比べ、未所属型は「ない」者が50.9%である。「スポーツ欄」への興味は所属型の69.4%が「ある」のに対し、未所属は50.9%が「ない」と答えている。「スポーツをして汗をかくこと」については所属型の95.4%が「好き」であり、未所属型は13.1ポイント低い。

「運動不足」については未所属型が92.2%、所属型が66.6%「感じている」としており所属型のクラブ活動量が充分でないことが伺える。

「自分の体力への自信」は所属型52.2%が「ある」とし、未所属型はその半分である。

「スポーツ観戦」の種目や、「将来やってみたいスポーツの種目」については、所属の型に関連なく「テニス、スキー、水泳、ゴルフ、乗馬、エアロビクス」等の野外での個人種目が多く、社会のニーズや情報によって選択肢が変化していると思われる。

4. まとめ

所属型に幼小期における戸外での遊びが多くみられ、親のスポーツへの関心も高い。スポーツの好きな者が多く、現在のクラブ活動所属率は約70%である。参加姿勢も積極的であり、スポーツ欄への興味もあるが、自己の運動不足や体力への自信は50~66%である。

未所属型は過去の体育授業でのマイナス体験や、スポーツの好嫌度が影響し、現在のクラブ所属は所属型の1/2である。活動も名目的で、自己の運動不足や体力への自信もないが、将来やりたいスポーツは所属型と同じである。

現代青年(女子)のスポーツ意識・行動の傾向について

松浦 三代子 (東京女子体育大学)

青年女子 スポーツ意識 スポーツ行動 体育好き 体育嫌い

1. 研究目的

1980年文部省指導要領の改訂により「楽しい運動」が提唱されて10年が経過しようとしている。その成果は今日のスポーツ人口の増加が証明している。特に女性のスポーツへの関心の高まりは目を見張るものがある。スポーツの種類、質、スタイルも様々である。このようなパワーの生まれてきた背景には、スポーツの大衆化現象、すなわち女性が家庭から解放され、社会進出への抵抗感が減少し、また豊かな社会の到来に伴って美容や健康への強い関心がスポーツ行動に結びついたものと思われる。しかし他方では受験競争の弊害による進学塾通いから運動体験の乏しさ、その他いろいろな体験不足が原因で運動嫌いになっている者も見受けられる。これらは幼小児期における両親の養育態度や養育環境の影響などによるものと思う。

本研究は小、中学時代にスポーツや体育の好きであった者が、どのような養育環境で成育しているか、また過去にどのようなスポーツ体験をしているか、現在のスポーツ意識から、さらに将来のスポーツに対する期待等はどのようなものであるかについて調査を試み、現代青年(女子)のスポーツ行動の傾向を探ろうとするものである。約70項目の質問中、有意差の認められた因子を中心に考察する。

2. 研究方法

対象者は以下の通りである。(1)方法 関東、東北地方の短大、大学の各2年の女性を対象にアンケートによる調査 (2)調査時期 1990年4~5月 (3)対象者 短大2年生 603名 大学2年生 941名 合計 1,544名

3. 結果、考察

(1) 小、中学生時代に①学校の「体育が好き」であったと答えた者のうち、大学生では「非常に好き」31.7%「好き」55.5%短大生では「非常に好き」28.5%「好き」61.4%いずれも高い数値を示している。②学校の「授業の楽しさ」についてみると大学生は「非常に楽しい」5.5%「楽しい」60.7%短大生「非常に楽しい」6.1%「楽しい」68.4%となっている。①と②を比較すると、学年があがるにつれて「体育嫌い」になる傾向が伺われる。

体育嫌いの原因には、幼小児期の両親の養育態度の在り方をはじめ、日本のスポーツ発展の様相にもみられる。学校では運動部と選手が中心である。学校、社会ともに一般の者や劣る者のための施設もクラブもそして機会も殆ど用意されることがなかった。学校体育の指導の在り方にも責任があると思う。

特に、体育が好きであった者の幼小児期の両親の養育態度をみると①父母ともによく遊んでくれた②母親の躰が厳しかった③父母ともにスポーツ活動に理解をしてくれた④父母ともにスポーツに興味を持っている⑤市街地に居住した者が多い⑥遊び場は校庭、公園、家の周囲である。①③④⑤⑥は0.1%、②には5%の有意差が認められ、養育環境の及ぼす影響の強いことが認められる。

(2) 現在、あるいは過去の体育の授業で「いやな思い」をしたことがあるかについてみると、大学生の場合67.7%、短大生の場合67.5%で、その内容は①うまくない、②無理やり

にやらされた、③ゲームをさせてくれない等の項目があげられている。(大学、短大いずれも0.1%の有意差)

教師の考える体育の楽しさは教育目標や、それを達成するために、自分達が行う教育活動と結びついた「楽しさ」になりがちであり、生徒の側は必ずしもそのようには受けとめていないこともある。特に学校体育は規則や激しい運動があつて学習者の中には、つまらないとする者も少なくないようである。

(3) 中学・高校時代のスポーツクラブの加入状況についてみると、クラブに3年間加入していた者は中学時代では大学、短大いずれの場合も約1/2である。高校になると「全く加入したことがない」者が「体育嫌い」の者で、(大学、短大20.7%)であるのに「体育好き」の方は(大学23.0%、短大27.0%)となる。一方「体育嫌い」でも中学では11~13%、高校では約4%の者が3年間も運動系クラブに所属していたということは注目すべきことと思う(いずれも0.1%の有意差)。高校になると加入率が下がるのは、種々な学科も加わり、運動以外に興味、関心も広がることや、また受験準備などの影響の結果と思われる。(4) 自由時間について1日の自由時間の量は大学生2~3時間が最も多く、次いで4時間以上となる。短大生は4時間以上が最も多く、次いで2~3時間となっている。その過ごし方をみると、平日では「テレビをみながらなんとなく過ごす」、「友達のつき合い」となっている。大学、短大ともスポーツ行動への志向性は4番目にあげられ、その数値は(11~13%)に過ぎない。(5) クラブ加入状況についてみると、大学、短大ともに加入率は50%にも満たない。またそのタイプは、大学、短大いずれも同好会志向である。最近の傾向をみると激しい規則や、激しい運動を嫌い、気の合った仲間、すなわち複数校で一緒に楽しく活動するサークルを好む傾向がみられる。

(6) スポーツの種目に対する関心についてみると、現在最もやってみたい種目は1位テニス、2位スキー、3位水泳、4位乗馬であり、将来にわたって行いたいスポーツ種目は上記の4種目に続いてエアロビクス、スキューバー、ゴルフ等があげられている。

(7) スポーツ、運動に対する意識について 大学、短大とも自分の健康には自信を持っている。さらに運動は健康に役立つ、自分の子どもにはスポーツをやらせたい等、社会的、精神的、肉体的にもそれ等の側面に養われる効果を認める傾向がみられる。運動不足を感じ、もっと運動がしたいと思っているのは大学生のほうである。

(8) 生涯スポーツへの期待について 結婚後もスポーツは継続したいと考えている者が多い。しかし、出産、育児を考えると夫や子ども家庭の協力がないと困難であろうと思う傾向もみられる。さらに、スポーツをすると「女性らしさ」が失われるなど、マイナス面をあげる学生なども多い(大学1%、短大0.1%の有意差)。

4. まとめ

以上、現代女子学生のスポーツ意識・行動にはたらく各条件についてみてきたが要約すると以下のものである。①運動の好き嫌いと同親の養育態度との間に強い関係がみられた。②体育好きな学生は総じて健康に自信を持ち将来ともこれを維持したいとの欲求がある。③スポーツによつて養われるであろう社会的、体力的、精神的側面に高い評価がみられる。④一般にスポーツ行動には積極的とはいえない。クラブ加入者は約50%でそのタイプは同好会やサークルタイプが多い。⑤生涯スポーツについては(イ)自由時間の増加(ロ)スポーツ人口の増加(ハ)スポーツは生活の中で重要な位置を占めるなどのことが予測されている。

女性の余暇活動参加歴に関する研究

○三宅基子（（財）日本レクリエーション協会）

蘭田碩哉（日本レク協会） 野村一路（日本体育大学） 菊池朋子（横浜女性財団）

三ツ谷洋子（女性スポーツ財団） 三沢澄子（スポーツプログラムス）

女性 余暇活動 参加歴

はじめに

男は仕事、女は家庭というこれまでの男女役割分業の考え方から、男も女もお互いに協力し合う男女共同へという意識の変化とともに、結婚、出産によって一時、家庭に入っても再び働くことが望ましいと考える女性の就職意識の高まりが総理府の調査などでも明らかになった。

さらに主婦の生活時間をもても、食事や身の回りの世話など家事労働の時間が減少し、交際やレジャー活動などの余暇時間、自宅外で過ごす時間が増加しているし、またレジャー白書の調査でも、現代の女性が家庭だけにとどまらず、余暇時間を含め活動的な時間を過ごしている。

しかしながら女性の場合、年代によって余暇時間の変動が大きいことや、ライフサイクルによって余暇生活の変化が指摘されているように、余暇活動への参加が男性に比べて分断しやすい特徴がある。また女性の社会進出が進むに連れて、女性の生活パターンが複雑になっており、単に年代別の統計調査では、真に女性の余暇行動の実態をとらえていたとはいえないのではないかと考える。

そして女性の余暇行動の実態を明らかにするには、生活形態の違いや変化と余暇活動への参加の関係を質的な調査による研究がおこなわれなければならないと考える。

目 的

本研究は、女性の余暇活動の非継続性に着目し、余暇活動とその参加年齢の関係を就学時から現在にいたるまでの余暇活動参加歴を明らかにすることを目的とする。

方 法

① 調査サンプル

調査サンプルは東京、神奈川に在住している、過去に何等かの活動を行っていた（学生時代に運動部に所属していた女性）と、現在何等かの活動を行っている（Y市の社会教育施設で開催している講習会参加者およびYスポーツクラブ会員）の合計200名である。

② 調査方法

本調査は就学時の余暇活動と卒業後から現在までの余暇活動について、その活動種目参加頻度、始めた理由、やめた理由等について、直接または郵送によって200名に調査を実施した。本調査の有効回答数は106票（53%）であった。

③分析方法

本研究は、就学時から現在までに行ったことのある活動種目と行っていた期間を記入してもらった。また各種目ごとに始めた理由とやめた理由を所定の項目（21項目）の中から複数選択で回答してもらった4項目を分析の対象項目とした。

また分析方法は自由に記入してもらった活動種目ごとの回答率と、活動種目ごとの参加年齢の分布について集計を行った。また始めた理由とやめた理由については、項目ごとの回答率によって分析をおこなった。

結果および考察

女性の就学時に行っていた余暇活動で回答の多かった活動は、スポーツ活動（54.6%）と学習活動（30.4%）である。卒業後から現在までの間の活動では、スポーツ活動（33%）、学習活動（27.3%）で、就学時に半分以上の人が行っていたと回答したスポーツ活動は、卒業後には3割に減っている。逆に地域活動とボランティア活動を行っているとの回答が、卒業後から現在までの期間で3.4%と12.3%で、それぞれ就学時の時に行ったことがあると答えた人の割合に比べて、増えている。

次に卒業後から現在までの間に行ったことのある活動について、その始めた理由について見てみると、「自分の趣味にあう活動だから」（18.3%）、「友人に誘われた」（14.3%）、「以前からやってみたかった」（13.3%）の回答が、他の項目よりも多くなっている。逆に「子供の手が離れた」「子供をきっかけにグループができた」などの子供に関連して活動を始めたと回答した人の割合は、その他の項目と比べて際立った差は認められなかった。

これらの分析結果をふまえながら、発表当日はさらに卒業後から現在までに余暇活動を行った年齢をさらにこまかく種目ごとに分類し、または始めた理由と途中でやめた理由との関係について詳細な分析結果を発表する。

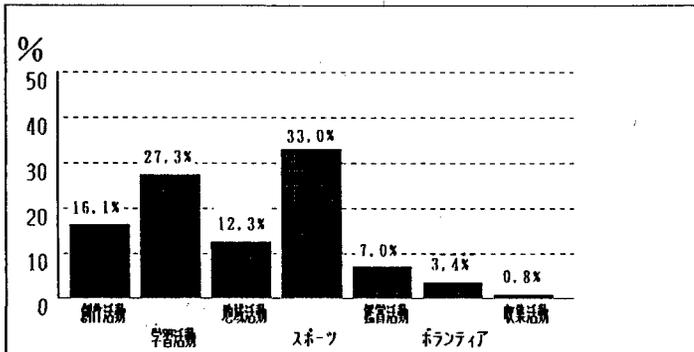


図1: 卒業後から現在までに行ったことのある余暇活動

表2: 卒業後から現在までに行った活動のはじめた理由

| 始めた理由 | 女性 | |
|-------------------|------|------|
| いい指導者がいたから | 58 | 5.7 |
| 友人に誘われた | 142 | 14.3 |
| 地域活動で仲間ができた | 19 | 1.9 |
| 子どもをきっかけにグループができた | 32 | 3.2 |
| 子どもの手が離れた | 50 | 4.9 |
| ゆとりがあるから | 44 | 4.4 |
| 近所にグループ等があった | 50 | 4.9 |
| 最近身体の調子がよいから | 8 | 0.8 |
| 経済的ゆとりができた | 11 | 1.1 |
| 経費のからない活動だから | 24 | 2.4 |
| 自分の趣味にあう活動だから | 185 | 18.3 |
| 身体によいことをしたかった | 27 | 2.7 |
| 友人がほしかった | 13 | 1.3 |
| ストレス解消になる | 49 | 4.8 |
| 家族に誘われて | 22 | 2.2 |
| 以前からやってみたかった | 135 | 13.3 |
| みんながやっているから | 2 | 0.2 |
| 特に理由はない | 11 | 1.1 |
| 必要性を感じた | 76 | 7.5 |
| 資格取得のため | 24 | 2.4 |
| その他 | 30 | 3.0 |
| 合計 | 1012 | |

リゾート地におけるレジャー・ダイバーの意識について

○千足 耕一（筑波大学大学院）

吉田 章（筑波大学体育科学系） 真竹 昭宏（筑波大学研究生）

スクーバ・ダイビング、海洋スポーツ、リゾート、レジャー活動、動機

【目的】

我が国における海洋スポーツのうち、スクーバ・ダイビングに対する注目度は年々増加し、また、今後実施したい海洋スポーツの種目の中でも高い割合を示している（酒井、山口、1989）。我が国のレジャーダイビングは1960年台に興隆の兆しを見せ、レギュレータ、残圧計やB・C（Bouyancy・Compensator＝浮力調整具）などの器材の進歩によって誰にでも可能なものになり、さらに器材のカラー化による女性の参加促進、余暇時間の増大や自然志向の高まり等の要素が加わることによって、1985年頃からダイビング人口は爆発的に増加しその数は推定35万人といわれている（海中開発技術協会調べ、1989）。

四方を海に囲まれた我が国においては、各地にダイビング・スポットが開設されており、沖縄を中心とする南西諸島、伊豆半島、伊豆諸島、南紀などは、とくに人気の集中している海域である。さらに1980年ごろから国内のみならず、国外のダイビングリゾートでのダイビングが盛んになってきている。この傾向はダイビング・ツアー関係への旅行業者の参入や国際経済における円高傾向により定着し、さらに1988年の法定労働時間に関する労働基準法の改正などの要因により今後ますます強くなっていくであろう。そこで本研究では、国外のダイビング・リゾートにおけるレジャー・ダイバーを対象としてダイビングを行なう動機について調査し、ダイバーの意識を明らかにすることを目的とした。

【方法】

本研究の調査対象者は、1990年7月16日から同年9月10日までの間、サイパンへレジャー・ダイビングを目的として訪れた、男子68名、女子62名の計130名である。この中より、Cカードを有し、かつインストラクターではない男子60名、女子60名の計120名を今回のサンプルとした。サンプル特性としては、平均年齢28.2（SD;5.4）歳、平均経験年数3.2（SD;3.4）年、平均経験ダイビング数53.7（SD;73）本であった。

調査方法としては、Beard & Ragheb（1983）がレジャーに対する動機を測定するために作成したLeisure Motivation Scale（LMS）を和訳したものにスクーバ・ダイビングの状況を考慮して修正を加えた32項目からなる質問紙を用いた。それぞれの項目に、「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5段階評定尺度を設け、動機の高い順から5点、4点・・・1点を与えた。このような調査用紙をサイパンにおいて配布・回収した。

【結果と考察】

1. スクーバ・ダイビングの動機の特徴

「かなりあてはまる」「非常にあてはまる」の回答が顕著であった項目は、5.自分の好奇心を満足させるため(93.3%)、21.何か新しいことを発見するため(80.8%)、14.いろいろな人たちと新しい出会いがあるから(70.8%)、29.ストレスや緊張をやわらげるため(68.3

%)、20.日々の生活の忙しさやあわただしさから逃れるため(65.8%)、の順であった。これらよりダイバーは知的好奇心からダイビングをおこなっており、同時に休息・気晴らしを求めていることがわかる。また、ダイビングは旅行を伴うことが多く、同時に新しい出会いを求める傾向にあるといえるであろう。

2. 性別による動機の比較

性別が動機に関与する要因であるか判定するために、「知的」、「社会的」、「能力・熟達」、「刺激・逃避」の4因子得点について、男性、女性の2群間のt検定を行なった。

その結果「社会的」、「能力・熟達」、「刺激・逃避」の3因子において有意差がみられた。すなわち、「社会的」因子においては男性が女性に比べて有意に高く、「能力・熟達」因子においても男性が女性に比べて有意に高かった。また、「刺激・逃避」因子においては女性が男性に比べて有意に高い値を示した。(表-1)このことから男性は女性に比べて仲間作りや新しい出会いといった動機が強い傾向にあり、また比較的技術や能力に関心が高いことがわかる。そして、女性は日常生活の忙しさから逃れるといったような、気晴らしのレジャーとしてダイビングを行なう傾向が強いといえるであろう。

3 経験による動機の比較

ダイビングの経験と動機の間連をみるために、タンク経験本数50本以上の熟練者と50本未満の非熟練者の2群間のt検定を行なったところ、「社会的」、「刺激・逃避」の2因子において有意差がみられた。「社会的」因子においては非熟練者が熟練者に比べて有意に高く、「刺激・逃避」因子においては熟練者が非熟練者に比べて有意に高かった。(表-2)このことはダイビングの経験が豊富なダイバーほど息抜きや気晴らしという動機でダイビングを続けており、経験の少ないダイバーは、新しい出会いを求めるなどといった動機が強い傾向にあると考えられる。

表-1 性差による動機の比較

| 因子 | 男性 n=60 | | 女性 n=60 | | t値 |
|-------|------------|------|------------|------|---------|
| | M | SD | M | SD | |
| 知的 | 3.34 | 1.17 | 3.32 | 1.26 | 0.26 |
| 社会的 | 3.17 | 1.01 | 2.86 | 1.21 | 5.25*** |
| 能力・熟達 | 2.95 | 1.11 | 2.80 | 1.18 | 2.25* |
| 刺激・逃避 | 3.16 | 1.14 | 3.42 | 1.24 | 4.16*** |

*P<.05 **P<.01 ***P<.001

表-2 経験による動機の比較

| 因子 | 非熟練者 n=89 | | 熟練者 n=31 | | t値 |
|-------|--------------|------|-------------|------|----------|
| | M | SD | M | SD | |
| 知的 | 3.36 | 1.23 | 3.26 | 1.19 | 0.85 |
| 社会的 | 3.08 | 1.11 | 2.84 | 1.12 | 5.31*** |
| 能力・熟達 | 2.85 | 1.16 | 2.93 | 1.10 | -0.61 |
| 刺激・逃避 | 3.17 | 1.19 | 3.62 | 1.18 | -8.18*** |

*P<.05 **P<.01 ***P<.001

【まとめ】

ダイビング・リゾートにおけるダイバーのダイビングを行なう動機は知的好奇心、休息・気晴らし、新しい出会いなどが大きな特徴である。しかし、ここで問題を感じるところは「能力・熟達」因子の得点が低く、安全で楽しいダイビングにとって本質であると思われる潜水技術や潜水能力の伸長ということに関してのダイバーの意識が比較的低いということである。技術、トレーニングや認識の不足等からくる潜水の事故を防止するためにもダイバーに「能力・熟達」に関する動機づけができるような指導が必要になってくると考えられる。

民間スポーツクラブの将来予測に関する研究Ⅱ

-成熟期におけるスポーツクラブ運営への提言-

○富山浩三(大阪YMCA社会体育専門学校)

原田宗彦(大阪体育大学)

民間スポーツクラブ 将来予測 デルファイ法

Ⅰ. 緒言

民間スポーツクラブの施設数は急激に増加を続け、1987年から1989年の3年間には年間約200施設づつ増加を続けてきた。しかし今年に入ってそのペースもやや鈍り始めており、こういった現象はプログラムライフサイクル理論における成長期から成熟期への移行を示唆している。成長期においては、増加の速度が余りに急激であったために、指導者養成やプログラム開発の立ち後れなどの問題が指摘された。しかしながら、今後成熟期を迎え、我々の前には解決すべき新たな問題が横たわっている。公共スポーツ施設との競合、厚生省の健康増進施設認定や指導者資格認定制度といった行政の民間スポーツクラブ運営への関与、会員の運動継続率の向上などがそれである。今後、民間スポーツクラブが健全に発展し、運動の習慣が国民の間に定着して行くために、我々はこういった問題について有効な回答を用意しなければならない。しかしながら民間スポーツクラブの歴史は非常に浅く、その将来を予測するための資料はまだまだ十分蓄積されているとはいえない。

筆者らは、1989年に「民間スポーツクラブの将来予測に関する研究」を行った。これは、全国のスポーツクラブ関係者、及び学識経験者を対象としたデルファイ調査であり、スポーツクラブの将来について多くの資料を得た。今回は新たにいくつかの項目を加え、スポーツクラブの将来予測のための基礎資料を得、今後の民間スポーツクラブ運営への提言を行うことを目的とする。

Ⅱ. 調査方法

今回のデータは、デルファイ法による質問紙調査によって収集した。調査対象は、全国の民間スポーツクラブの責任者またはマネージャー861人である。第1次調査の調査時期は1990年6月で、有効回答数233、有効回答率27.0%であった。第2次調査は、第1次調査で回答のあった233名に対して、第2次調査用紙を1990年9月に郵送した。第2次調査の有効回答数は54、有効回答率23%であった。

Ⅲ. 結果及び考察

1) 回答者のサンプル特性

回答者のサンプル特性は表1の通りである。

表1. 回答者のサンプル特性

| | 男性 | 女性 | 平均年齢 | 平均勤続年数 |
|-------|------------|----------|-------|--------|
| 第1次調査 | 184(92.5%) | 15(7.5%) | 31.8歳 | 7.4年 |
| 第2次調査 | 50(92.6%) | 4(7.4%) | 36.9歳 | 8.8年 |

2) 前回調査との比較

はじめに、前回行った調査(1989)と今回の調査の比較を試みたい。施設数について、民間スポーツクラブは今後どこまで増え、いつごろピークを迎えるのだろうか。前回の調査では、1993年に2039施設でピークを迎えるという結果であった。しかしながら、今回の調査では、

ピークは3年遅れて1996年に2011施設であると予想されたのである。体力健康新聞の調べによると、1987年から1989年までは毎年200施設を超える新設があったものの、今年に入ってから増加のペースが衰えはじめ、上半期の新設数は昨年と同じ時期を下回るものとなり、このままで行くと今年の新設数は200施設を下回る見通しである。その理由としては次のような事が考えられる。第1には、地価の高騰があげられる。特に大都市圏の地価高騰は社会問題にもなっており、スポーツクラブを建てても採算が取れなくなりつつある。第2には、現在の施設数は、約人口10万人に1箇所の割合で存在する計算となり、主な場所では飽和状態になっているのではないかということも考えられる。

3) 公共施設との競合について

かつて公共スポーツ施設での活動と言えば、市民体育館でウエイトトレーニングや球技などが行われていた。しかしそこでの活動は一部の常連利用者によって占められ、職員も非常に管理者的な接客態度の所が多く、初心者にとっては非常に利用しにくいものであった。しかしながら状況は変化し、一口に公共施設と言っても、最近では第三セクター方式で運営されるスポーツクラブまで登場している。またそこで提供されるサービスの質も民間に劣らないものとなってきており、今後民間のスポーツクラブと公共スポーツ施設が競合する事が十分考えられる。今回の調査対象施設のうち、営業面で公共施設の影響を受けていると答えた施設は全体の19.8%であった。その内容は、「公共施設の低料金システムによる影響」、「公共施設のアルバイトに対する好待遇により人材確保が困難」、「公共施設の規模による影響」などである。また反対に、「公共施設により地域のスポーツ活動が活発になり好影響を受けている」という回答もあった。今後公共施設と民間施設は共存・共栄できるかを尋ねた結果、第1次調査では56.0%の回答者が「できる」と答えており、「できない」と答えた者は23.1%とやや楽観的な結果となった。共存のための方法としては、「異なる客層を対象とする」「指導方法で差別化」「コンセプトによる差別化」などがあげられた。

4) 行政のスポーツクラブ運営への関与について

現在、文部省、労働省、厚生省の行う指導者資格認定制度や、労働省の「労働省健康増進サービス指導機関」及び厚生省の「健康増進施設認定」にみられるようにスポーツクラブの運営に行政が関与する部分が増えてきている。こういった動きについて施設側はどう考えているのだろうか。行政の関与について「賛成である」と答えた者は47.2%で、「反対である」と答えた者は25.6%であった。また賛成であるとした理由は、「健康への関心が高まる」、「クラブの質が公に認められる」、「インストラクター及び業界の地位向上につながる」、「施設乱立の抑制になる」などであり、反対であるとした理由では、「施設の内容やレベルが画一化してしまう」、「民間活力を妨げる」、「各省庁の縄張り争いに過ぎない」などがあげられた。

IV. まとめ

民間スポーツクラブの責任者、マネージャーを対象に、デルファイ法によって将来予測を行った結果、次のような結果が得られた。

- (1)民間スポーツクラブの施設数増加のピークは、1996年に2011施設であると予測され、1989年に筆者らの行った調査結果と比較するとピークは3年伸び、ピーク次の施設数はやや少なく予測されている。
- (2)現在、19.8%の施設が運営面で公共スポーツ施設の影響を受けていると答えている。しかし今後共存できるかについては楽観的な識者が多い。
- (3)行政の民間スポーツクラブ運営への関与については、47.2%の者が賛成であると答えているものの、その内容については不満の声も多く、「概論賛成各論反対」といった傾向がみられる。

「レクリエーション研究」投稿規定

昭和46年3月 制定

昭和57年6月12日改正

昭和58年7月1日改正

平成元年2月2日改定

1. 投稿者は、本学会々員であること。ただし、編集委員会が必要と認めた場合にはこの限りではない。
2. 投稿内容は、レジャー・レクリエーションを対象とした研究領域における原著論文・研究資料・評論・書評・実践報告・その他とし、完結していること。また、他誌に未投稿・未発表のものに限る。
3. 投稿に際しては、原稿の冒頭に前項に挙げた区分の内、該当するいずれかの種類を朱書し明記する。
4. 原稿は、400字詰原稿用紙（A4版）に黒インク書きまたは、ワープロ（A4版、800字；25字×32行）で仕上げるものとし、本人はひらがな現代かなづかいとする。また、外国語のかな書きにはカタカナを用いて表記し、欧文の記述にあたってはタイプまたは活字体を用いて表記することとする。
5. 図表および写真は、オリジナルなものとし、必ず通し番号とタイトルを記入して一枚ずつ台紙に貼り、本文とは別に一括して添付する。また、図表等の挿入箇所は本文欄外に図表番号をもって朱書し明記する。
6. 投稿者は、氏名と共に勤務先または所属機関名を（ ）内に表記すること。
7. 論文および資料の原稿には、欧文による題目・著者名・所属機関名・抄録・キーワード、ならびに欧文抄録とキーワードの和訳を別紙により添付する。なお本文が欧文原稿の場合には、邦文による同様な様式を整えて添付する。
8. 引用文献は、原則として本文の最後に著者名のA、B、C順に通し番号を付けて一括し、雑誌の場合には、著者：題目，雑誌名，巻号，ページ，西暦年号. の順に、単行本の場合には、著者：書名，ページ，発行所，西暦年号. の順に記載する。なお、本文中の引用箇所の右肩上に該当する文献番号を付すこととする。
9. 原稿は、一篇につき図表・写真共刷り上り10頁（400字詰原稿用紙約35枚）以内を原則とする。ただし前記規定以上の頁数を必要とする場合や、特殊な印刷を必要とする場合には、編集委員会の承認を経た上で、その費用の超過分を投稿者の負担とする。
10. 掲載論文については、別刷り30部を執筆代表者に無償で送付する。なお更に部数を必要とする場合には、投稿時点に申出ること。ただしその場合の費用は投稿者の負担とする。
11. 投稿にあたっては、オリジナル原稿とそのコピーを3部添付して提出する。なお、掲載論文にあたっては、その原稿は返却しないものとする。

12. 投稿原稿の採否については、本学会編集委員会において決定する。なお、採否の決定にあたっては、編集委員会が委嘱する審査員2名の審査結果を尊重する。
13. 本誌は、レクリエーション学会の機関誌として年2回（9月、3月）の発行を予定し本誌への掲載は、原稿受理の順序による。
14. 大会発表論文集への投稿規定については、別に定める。
15. 本誌への投稿は、下記編集委員会宛てに行うこととする。

〒305 茨城県つくば市天王台1-1
筑波大学 体育科学系 吉田 章 研究室内
日本レクリエーション学会 編集委員会
(TEL 0298-53-6334)

研究論文の投稿は、常時受付けて
おります。

積極的にご投稿下さい。

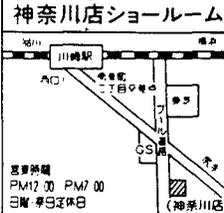
(編集委員会)

古、伝統 新、技術

伝統が創り上げた珠玉の剣道具

株式会社 松碑堂

神奈川店ショールーム



営業時間
PM12:00 PM7:00
日曜・祭日定休日

〒210 川崎市幸区南幸町2-60
☎(044)511-2634

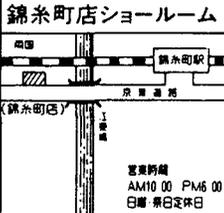
渋谷店ショールーム



営業時間
平日AM10:00 PM7:00
日曜・祭日PM12:00 PM6:00

〒150 渋谷区道玄坂2-17-3
☎(03)463-0471

錦糸町店ショールーム



営業時間
AM10:00 PM6:00
日曜・祭日定休日

〒130 墨田区練町4-26-8
☎(03)632-0364

本社工場 〒151 東京都渋谷区本町5-41-11
☎03(376)4471代 FAX 03(375)1022

神奈川店 〒210 神奈川県川崎市幸区南幸町2-60
☎044(511)2634

道玄坂店 〒150 東京都渋谷区道玄坂2-17-3
☎03(463)0471

錦糸町店 〒130 東京都墨田区練町4-26-8
☎03(632)0364

和歌山店 〒641 和歌山市西高松2-16-22
☎0734(44)0283代

秋田工場 ☎01834(2)3851代

クリエイティブから
プリントまで
スピーディーを
モットーに!

営業品目

| | |
|------------|--------|
| 一般事務機械各種伝票 | 一般事務帳票 |
| 電子計算機用連続伝票 | カタログ |
| ポスター | カレンダー |
| パンフレット | 営業案内 |
| 社誌 | 新聞 |
| 機関紙 | 文献 |
| 書籍 | 洋式帳簿 |

総合印刷
株式会社 **文天閣**

新潟市津島屋7-20 TEL (025)272-0123(代) FAX (025)272-0128

●東京営業所 東京都千代田区九段南2丁目4番9号 仙波ビル8F TEL(03)3263-9931 FAX(03)3263-9929
●秋田営業所 秋田市山王3丁目1の17番地 キングビル6F TEL(0188)62-1839 FAX(0188)64-7861

Matsukan

「かたち」は同じ用具でも
伝統と技術で裏付けると、
信頼のマツカン

野球用品
剣道具
柔道・空手
銃剣道・逮捕術
ゴルフ用品
トレーニング機器
各種スポーツウェア



松勘工業株式会社

本社/埼玉県加須市土手1-4-27

TEL.(0480)61-2211(代表)

支店/東京都台東区雷門2-8-5

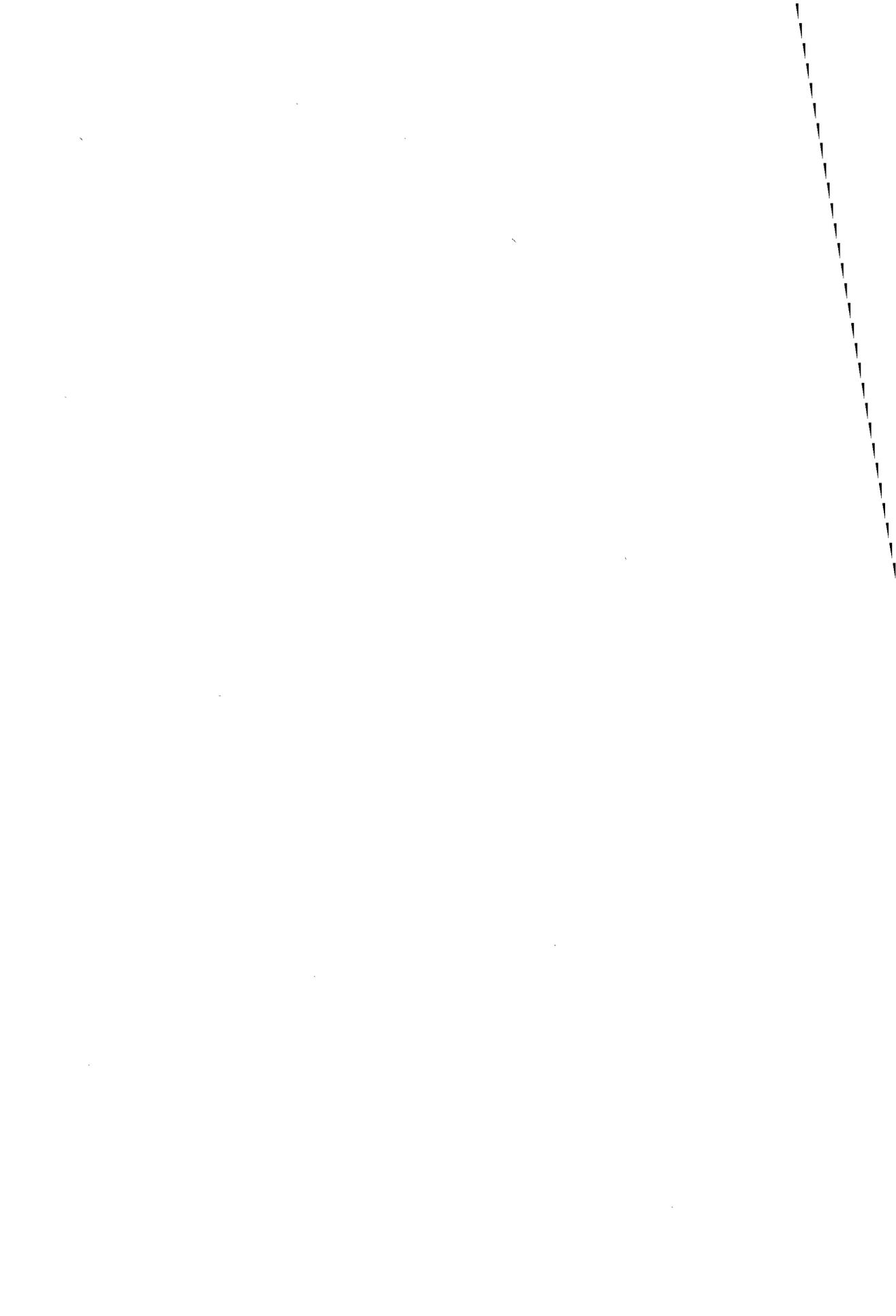
TEL.(03)841-2411(代表)

| | | | |
|-----------------------|--------|-------------------------------|--------|
| 体育講義資料研究会編 | 1,900円 | 伊藤勝三・中原伸記共著 | 2,060円 |
| 大学体育理論 | | 現代健康の科学(改訂版) | |
| 大学保健体育研究会編 | 1,900円 | 今村嘉雄他監修 | 1,550円 |
| 改訂体育学概論 | | 女性の健康と体育(改訂版) | |
| 手塚政孝・本田泰治・西林賢武・佐藤行那著 | 1,860円 | 渋谷梢・平瀬沙紀子・真崎祥子・伊藤克子著 | 1,339円 |
| 学生のための健康と体力 | | 健康を考える | |
| 東京農業大学体育研究室編 | 1,800円 | 長田一臣著 | 1,300円 |
| 保健体育理論 | | スランプに挑む—「人生の波を乗り切るために」 | |
| 千葉商科大学体育研究室編 | 1,700円 | 和田政雄編 | 2,884円 |
| 現代生活とスポーツ(改訂版) | | “和”実践レクリエーションII | |
| 野口盛雄・岩島正雄・東谷拓他著 | 1,650円 | 徳田克己・塙和明・青木省三編 | 1,800円 |
| 教養の保健体育理論 | | わかりやすい精神保健学 | |
| 阿久津邦男・鈴木啓三著 | 2,369円 | 阿部明子・岩崎洋子編著 | 1,545円 |
| 序説身体機能論 | | 幼児の身体活動 | |
| 阿久津邦男著 | 1,854円 | 佐藤和兄・畠山トミ共著 | 2,060円 |
| 健康体力論(改訂版) | | 体育あそび素材集—手軽な用具で楽しめる | |
| 中原凱文著 | 2,884円 | 熊谷清司著・伊藤昭画・中村潤子編 | 1,236円 |
| 運動の生理学 | | 草花あそび | |
| 佐藤和兄著 | 1,800円 | 落合聰三郎監修/中谷君恵他編著 | 2,060円 |
| 教養体育学 | | 保母がえらんだ遊びの本 | |

東京都文京区目白台1-9-9 **文化書房博文社**

電話 03(947)2034(代表)

振替口座 東京8-86955



編 集 委 員 会

吉 田 章 (委員長)

松 浦 三代子

鈴 木 秀 雄

寺 島 善 一

Editorial Committee

A. Yoshida (Chief Editor)

M. Matsuura

H. Suzuki

Z. Terashima

Subscription published two times a year: one issue in Japanese with abstracts in English and another issues in only Japanese, by Japanese Society of Leisure and Recreation Studies. Subscription is available to libraries, institutions, department, and individual members at the equivalent amount of foreign currency of 6,000 Japanese yen as a member (U. S. \$30 at present inclusive of postage).

Address: Subscription Manager, Japanese Society of Leisure and Recreation Studies.

AOYAMA Gakuin Univ. (c/o Room 2002)

4 - 4 - 25 Shibuya, Tokyo, JAPAN. # 150

「レクリエーション研究」 第23号

～第20回日本レクリエーション学会 大会発表論文集～

1990年10月20日 印刷

1990年11月1日 発行

発行人 田 中 鎮 雄

発行所 日本レクリエーション学会

〒 150

東京都渋谷区渋谷 4 - 4 - 25

青山学院大学 2号館 2002研究室気付

電 話 03 - 498 - 6939

印刷所 榑 文 天 閣

〒 951

新潟市津島屋 7丁目20番地

JOURNAL
of
Leisure and Recreation Studies
No.23

Special Issue:

Paper Presented at The 20th Japanese Society of Leisure
and Recreation Studies Congress

(Nov. 10·11, 1990)

(Meiji UNIV.)

Japanese Society of

Leisure and Recreation Studies(JSLRS)

Nov. 1990